

# 小田原史談

第 164 号

発行所 小田原史談会  
小田原市栄町 2-13-20  
アオキ画廊内 電話 (24) 0637

## 私の早川村誌

### 紀伊神社 木地椀と三筋壺

青木友吉

早川牧から早川荘へ

常々私は、『新編相模国風土記稿』(以下風土記と略称)に載る、「早川村ハ早川庄ノ原村ニシテ」の一句にこだわっている。生れ育った早川村 紀伊神社神宝木地椀



(現小田原市早川)の歴史に関心をもち続けて来た訳でもある。

早川庄(荘)の範囲を、風土記により大まかに捉えると、狩川右岸以西の小田原市、宮城野、仙石原を除く箱根町、それに真鶴町、湯河原町を加えた地域となる。

更に、風土記は、古書に往々早川尻と記すのは、早川村のことであるとしているが、川の流れが変わったかも知れず、早川尻は、右岸の早川村か、左岸の旧小田原町の地域かは究明できない。

眞福寺に接する、早川村の谷間には、縄文早期・中期・後期の土器の小さな断片が残っていた。私は、今から三十年ほど前に、これを採集して、国学院大学助教授の金子皓彦先生(現東京女子大学教授)にお渡しした事がある。

この例からして、早川村は、国津

神・天津神の太古から人々の生活していた跡が色濃く残っていることが分かる。

ところで、早川が史料の上に初めて出てくるのは、古代末期の荘園(荘園)としてである。

このことは『中右記』(『神奈川県史』史料編Iに収録)に次の二つの出来事が記されている。

嘉保二年(一〇五五)一月十日、大江公仲は、隠岐へ流されるに当って、相模国早川牧などの所領を処分している。

大治五年(一一二〇)、大江仲子(公仲の長女)は、相模国早川荘の公仲の遺領を巡って散位有経(公仲の養子)と争っている。

註 『中右記』右大臣藤原宗忠の日記。寛治元年(一〇六七)から保延四年(一一三三)までが伝わるが、中間の一部が欠逸。

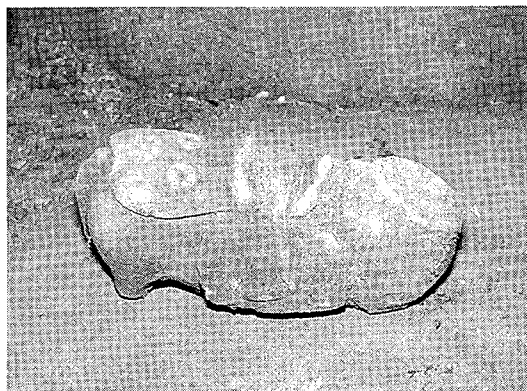
ところで、私は、早川荘の相論が身内同士の争いになっているのに関心がひかれたが、同時に早川牧より早川荘と、その呼び名が変わっているのも面白かった。

このことについて、『神奈川県史』(通史編I)は、

はじめは山ぞいの傾斜地、山野に私領の牧場として成立し、田島の開発を進めてついには荘園となつたものであろう。

と、説明する。領けるような見解

馬を象つた石造物



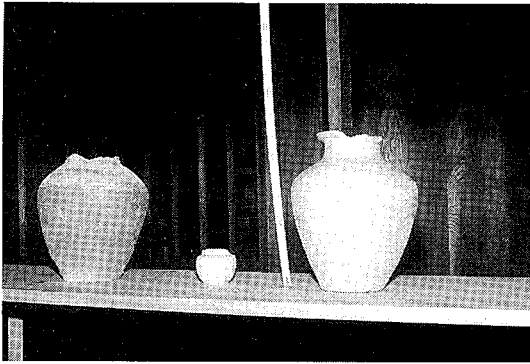
である。さらに、上掲『県史』は、早川荘は、県内では史料上、もっとも早く現れていると述べているのも、関心が寄せられる。

註 相論 土地に関して両当事者おのおのが主張すること。訴訟して争うこと(『日本国語大辞典』)。

村の鎮守の紀伊神社(紀ノ宮大権現)の境内には、馬を象る破損した石造物が残っている。私は、早川牧に關連がありはしないかと、興味を寄せたことがある。しかし、その製作年代が特定できないので、早川牧に結びつける訳にはいかない。

### 紀伊神社神宝の木地椀

紀伊神社の祖神は、五十猛命といわれ、のち惟喬親王が合祀されたと云い伝えられている。この事は、後



右より三筋壺(常滑産)・青白磁(中国景德鎮)・壺(渥美産)

でちょっと取り上げるとして、まず、紀伊神社の神宝として保存されて来た木地碗三個の事について述べたい。三個のうち一個は朽ち果ててしまっ

たが、残る二個が昭和四十五年十二月、小田原市重要文化財として指定された。

二個とも虫喰いされているが、永年保存に耐えられるように化学的処理が加えられた。うち、口径一七・八cmの小碗は汁碗として用いられたとみられている。口径一九・四cmの大碗は飯碗として使われたものと考えられているが、口縁は少しまくれ気味に加工され、ふくらみの外側に三本の影線がある。三本の線は、次に述べる三筋壺の三本のへら描きと関連があるのだろうか……。

ともかく、いずれも、楠材が使用

され、塗りの跡は見られず、ロクロをかけた木地の木目が出ている。この木地碗の作られた年代は、一

応、室町時代の作であろうとされたが、平安時代に遡れるという見方もある。

謎の三筋壺

早川村の成立の古さを示すものとして三筋壺がある。

大正六年(一九一七)、熱海線の敷設のため、神社移転の際に、本殿床下から三個の壺が発掘された。

早速、村民の一人が壺を海で洗いつつ綺麗にされた。ところが、壺を掃除した人は間もなく死んだという。ために祟りの壺として、社の納戸に納められたままである。今でも、その壺に触れると祟りがあるとされている。

その出土状態は全く分かっていない。ただ、全部、口の一部分が欠けていて水が一杯あふれていたと伝えるのみである。

初めて調査の手が入ったのは、昭和四十年一月の事で、その結果は、同四十二年三月、『小田原市文化財調査報告書』第一集として、市教委文化財保護課から発行された。報告書の内容は、次のように簡単なものであった。

- 壺1 高三・九cm
- 口径十九cm 常滑製
- 俗称三筋壺

大正六年鉄道工事により社殿移転の際、床下より出土

壺2 高二・五cm

口径一八cm 渥美窯  
首部破損 同時期出土

壺3 高五・二cm

口径六・三cm 青白磁  
陽刻唐草模様 宋時代  
同時期出土

しかし、この報告書の内容だけでは物足りない。

私は、宮司や神社総代の了解を得て、平成元年七月末、愛知県常滑市民俗資料館に、この三個の壺を持ち込んだ。

よく知られているように、常滑は、常滑焼で知られた焼物の産地である。三筋壺は、壺の胴体にへら描きの三本の水平線があるのが特徴で、それがこの壺の呼び名となった。

「これは、この常滑地方に数多くあった窯で作られたものですね。年代は平安時代末期のものでしょう」

静かな口調ながら、確信に満ちた表情で鑑定してくれたのは学芸員の中野晴久さんだった。

持ち込んだ三筋壺が、平安期末といわれ、咄嗟に、同時代に早川荘を支配した大江氏のことか頭の中に浮んだ。

大江氏は、早川荘を藤原氏に寄進した領家である(『神奈川県史』通史編1)が、実質的には領主であった。

註 領家 先に領主であった者が、上級権力者に荘園を寄進して、形式的にその下に属し、荘園からの収益を保持する者(『日本国語大辞典』)。

ところが、大江氏は、中流貴族ながら、早川庄の他に大和・摂津・遠江の各地にわたっており、早川庄を直接支配したものでない。その代行業の豪族がいる訳だ。その豪族が三筋壺に直接かわりあいがあったと思われるが……。

三筋壺を常滑民俗資料館に持ちこんでよかったと思う。三筋壺について年代のほか、産地、由来、用途など、色々教えて頂くことが多かった。その際に、「これが参考になるでしょう」と、くださったのは、『図録 末法の造形・三筋壺』という冊子である。

この資料館が、昭和六十三年十月から十一月にかけて、三筋壺展を開催するに当たって、編集発行したもので、三十ページ余りの冊子であった。それだけに、この資料館では三筋壺の調査研究が積み重ねられてきている訳だ。

この図録は、おそらく学芸員の中野さんが中心となってまとめられたものである。

八十点に及ぶ三筋壺の図版を載せた各ページには、静かに沈潜した情熱がこもっている感じがする。その中に越前窯や渥美窯のものが数点含まれていて、三筋壺は、常滑窯の特

12月16日(土) 逝去されました。享年82歳。蔭ながら小田原史談会のために尽くされた方です。ご冥福をお祈りします。

産ではないことが分ると同時に、常滑を中心とするものが圧倒的に多かったことを物語っていた。

以下、この図録をベースにして記す。

- ① 中国陶磁から影響説
- ② 五輪思想の反映説

三筋壺の中には、中国陶磁と類似したものがあるが、同じ時期に新しい中国陶磁の白磁碗を模したと考えられるものが作られていることから、新しい形の壺が入ってきた可能性は高い。しかし、三筋の文様をへら描きするようにした事を、中国陶磁

から説明するのは難かしい。

一方、五輪思想の反映とする見方については、当時の社会状況からすれば示唆に富んだ説明で、この時代背景には、五輪思想のような理念があったことは十分に想定できる。しかし、この説では個別的、具体的な現象を説明するのは多少無理がある。

註 五輪 仏教用語。宇宙を構成するもととなる、地、水、火、風、空の五つをいう。

この図説は、以上の二つの説を踏まえた上で、次のような見解を加えている。

三筋壺は、その形が中国の壺の影響で出来あがり、そこに仏具などに施された文様が組合わされたことよって成立したという想定が

可能である。

控え目な表現であるが、納得がいく学説のように思われる。

ともかく、三筋文は、当時流行したと捉えてよいであろうか……。

ところで「末法の造形」と図録のタイトル。

末法とは、世は末であるという仏教の予言的な時代観である。

釈迦の入滅後、一万年後の時期に末法の世に入り、処々に災厄争乱が起り、仏法は滅んでしまうと説く。

わが国では、仏滅を紀元前九四九年として、仏滅二千年の後永承七年(一〇五七)に末法の世に入ったとする。

その頃、武士勢力が次第に台頭し、都では戦乱が続発し、社会不安が増大し、この末法思想は、貴族を始めとする人々の心を深く捉えていた。

そして、経典が失われないうように、地中に埋納する経塚を築造することが流行した。

埋納する経典を収める容器の経筒は、一般的には銅製のものが用いられたが、その外に中国宋代の青白磁や国内産の陶製のものが用いられた。

ところが三筋壺については、経塚内でのどのような用い方をされたか、その調査例が乏しいので、はっきりした事は述べられないが、三筋壺は、経筒としても、また、その外容器としても使われたのではないかと推定されている。

『小田原市文化財報告書』の壺3

の宋代青白磁は、景德鎮と鑑定されたが、経筒として用いられたのだろうか？そして、その三筋壺は、経筒の外容器の役割を持ったものであるうか……。

しかし、この図録は、三筋壺は、墓跡に、蔵骨器として使われる例が多いと、解説している。

すると、紀伊神社の三筋壺の用途は、経筒または経筒の外容器としてか、それとも蔵骨器としてなのかということになる。

だが、そのいづれかと言うとなると、それを調査する方法がないため、全く判らない。

先に記したが、三筋壺など三個の壺が発掘されたとき、きれいにしようとして、海で洗われてしまった。その事は、村民の善意によって行われたことだが、現在ならば、そのままにして、付着物の分析によって、何が蔵されていたか判ったであろう。

それに、惟喬親王(平安時代八四〇)の伝承の事である。惟喬親王は、木地師の始祖であるという話は、全国各地に散在するが、親王は、早川の地で亡くなられ、紀伊神社の元地に埋葬されたという言い伝えがある。

この伝承は、埋葬されたのは惟喬親王でなく、他の人が葬られた可能性も考えられる。あるいは、その折三筋壺が蔵骨器として用いられたのであろうか？しかし、それを知る由もない。



# 小田原叢談 (三)

## 石井富之助

### 小田原の滄浪閣

伊藤博文の滄浪閣といえ  
ばたいの人が大磯だと  
思い、それより先に小田原  
にあったことを知らぬ人、  
あるいは忘れている人が多  
くなっている。

明治二十二年(一八九)の  
町村制施行によって小田原  
町が誕生した時、小田原は  
保養地、別荘地としてやっ  
ていこうということが基本  
方針の一つになっていた。

#### 滄浪閣跡地に立つ伊藤博文胸像



てよいであろう。博文はま  
ず父重蔵のために上幸田  
(お堀端通り)の南のはずれ  
今の松琴楼、音羽の前の松  
林の中に別荘を建てた。こ  
こはわたしの子供のころに  
は貴族院議員田辺輝実の所  
有になっていた。

博文は、別に御幸の浜に  
和洋風の別荘を構え、明治  
二十二年十月枢密院議長を  
辞すると、ここに移ってゆ  
うゆう自適の生活に入った。  
これが滄浪閣で、門に掲げ  
られた三字の額  
は巖谷一六の筆  
になるものであ  
った。

しかし、朝に  
相模などの萬波  
をのぞみ、夕べ  
に箱根の白雲を  
仰ぐという生活  
はそう長くは続  
かなかつた。国

会開設に伴って翌二十三年  
十月には貴族院議長となり、  
滄浪閣はそのままにして、  
居を東京へ移した。

この滄浪閣で特にしるし  
ておかなければならないこ  
とは、明治二十六年(一九〇  
の夏から秋にかけて法典調  
査会(総裁伊藤博文)の編  
さん委員であった穂積陳重、  
富井政章、梅謙次郎の三法  
学博士がここに起居を共に  
して日本民法の起草に当た  
り、第一章「人」を書き上  
げたことである。これによっ  
て、小田原は民法発祥の地  
といわれるのである。この  
ことは穂積重遠著『民法と  
小田原』にも書かれている。

神奈川県はくしくも明治  
の二大法典である憲法と民  
法の発祥地を持っている。  
憲法は横須賀の夏島、民法  
は小田原、この二か所は近  
代日本の出発に大きなかか  
わりのある土地として永く  
記憶さるべきであろう。

滄浪閣には明治二十六年  
(一九〇)一月から三月まで、  
常宮、周宮両殿下が御遊幸  
なさつたこともあり、これ  
が小田原御用邸建設のきっ  
かけになっているのである  
が、同二十九年五月、博文  
は大磯に新しい滄浪閣を作っ

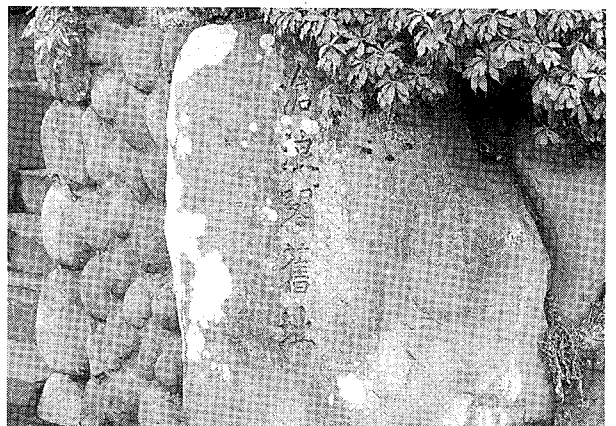
て移り住み、小田  
原は廃邸となった。  
ついでだが、大磯  
滄浪閣の扁額は李  
鴻章の書である。

それから幾星霜  
昭和十五年(一九四〇)  
の何月だったか、  
東京の金物商川島  
美保という人が図  
書館へわたしをた  
ずねてきた。

実は先きごろ御  
幸の浜に土地を買っ  
たが、聞くところ  
によると、この土  
地は、伊藤博文の  
滄浪閣の跡だとのこと、も  
しそうだったらこのままに  
捨て置くわけにはいかない。  
それについて教えていただ  
きたいということであった。

わたしはいろいろの資料か  
ら滄浪閣の記事を抜粋して  
やった。

川島氏は、記念碑を建て  
ることを思い立ち、奔走努  
力の結果、金子堅太郎伯選  
文の碑と本山白雲作の胸像  
とを建立し、昭和十六年  
(一九四一)五月十日その除幕  
式を盛大に行った。わたし  
は、いくらか手伝いをした  
ということ除幕式に招待  
されたが、その時記念品と



して出された胸像とまっ  
く同じのレリーフと記念絵  
葉書を今でもなお所蔵して  
いる。

ちなみに、本山白雲は品  
川弥次郎、板垣退助、伊藤  
博文(議事室内)後藤象次  
郎など多くの人々の像を製  
作し、銅像専門として知ら  
れた人であった。

現在御幸の浜にある伊藤  
博文の胸像、記念碑につい  
ては、知る人ぞ知るで、あ  
まり関心を持たれていない  
とはいえない。もっと注意  
が拂われ、大事にされなけ  
ればならない史跡であろう。

# 遙かなる霸王城 (3)

終戦から50年

中国戦線の回想

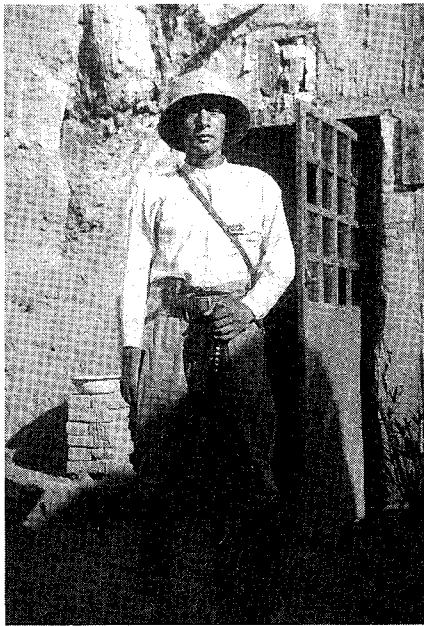
星野幸一

## 八 李九庄の戦闘とバツ夕の大群

李九庄は黄河の流れを背にした河畔の集落である。中国軍をこの村に追い込んだ栗栖部隊は、殲滅作戦を断行したのである。包囲網を圧縮するにつれ敵の抵抗は物凄く、足元近く銃弾の土煙が立ち流れ弾が不気味な唸りをあげて迫ってきた。砲煙の渦巻く戦場となり歩

兵は戦車隊の応援を得て漸く部落に突入した。歩兵砲も村に入ったが家屋は破壊され遺棄死体が散乱するゴーストタウンであった。この戦闘では対岸の敵陣地から山砲の砲撃を受けた。私が堤防に上がったとき砲弾の飛行音がポツと消えたので咄嗟に斜面に伏せた。その途端、堤防で大きな炸裂音と共に飛び散った土砂で体が埋ったが斜面に伏せたた

昭和十八年夏 霸王城花門にて(筆者)



め無事であった。黄河には敵兵が溺れ死んでいた。作戦を終え汲県に帰る道すがら遙かな南の空に黒っぽい巨大な塊が見えたのである。その塊が近づいてくるとバツの大群であった。その群れは、太陽を遮るため日中でも仄暗くなり、サワサワという羽音を立て地上に降り始めた。約三千万匹のバツは、見渡す限り厚手の絨毯を敷きつめたように、広大な畑の農作物は、一葉も残さず食べ尽くされ無残な黄色い大地と化したのである。そして大群は何処へか飛び去って行った。

このバツの大群を中国では飛蝗と呼び、発生のメカニズムは、同じバツの中にも一匹だけで生活している孤独相と集団で生活している群生相があり、それ等は同じ種でありながら形態的にも習性的にも全く異なり、群生相のバツが飛蝗の原因になるといふ。群生相のバツは飛ぶ力が強く多量の脂肪を体内に持っているため長距離を飛ぶことが出来、集団行動を起こす性格を持っている。

移動の原因は、最近の研究では長い干魃で繁殖地が極端に狭められたり、台風で広大な地域のバツが狭い地域に吹き寄せられる等気象上の原因と、大規模な農業地の開墾や農薬の大量使用等社会情勢の変化が、人為的な原因として認められているようだ。

何れにしても飛蝗は、大多数の農民が深刻な打撃を受け、バツタの集団行動による移動は、新たな繁殖地を求め生き残るための戦略であった。やがて第三大隊は第二大隊と警備地区を交代して霸王城陣地へ赴くのである。

## 九 霸王城

昭和十七年十月、汲県から京漢線で黄河北岸の詹店駅へ貨車輸送による移動が始まったのである。

霸王城は、昭和十六年十月、河南作戦の鄭州攻略後撤収に当り前線基地として黄河の鉄橋と河岸段丘を占拠した地点である(戦闘正面2km縦深1km)。



蘆溝橋を駆ける大隊砲(昭和17年)

鉄橋は、昭和十六年一月中国軍が新黄河作戦の退却時、自ずからの手で爆破したため、私たちは、鉄舟による船橋で南岸に渡河した。河岸から一〇〇m先の花門という集落に大隊本部とMG中隊が駐留した。鉄橋は間もなく工兵隊が爆破箇所にもなく架けて補修した。従来の戦闘は、陣地攻撃と遭遇戦が主流だが、今回は、敵と対陣である。歩兵中隊は右第一線、中第一線、左第一線陣地に展開、二十四時間体制の警戒配備に就いたのである。中第一線の張洞突出陣地は、東西に

大東亜戦争時の給与令 (昭和18年)

官等	号俸	月額(円)
大中将		550
中中将		483
少中将		416
大佐	1等	370
	2等	340
	3等	310
中佐	1等	310
	2等	280
	3等	250
	4等	220
少佐	1等	220
	2等	200
	3等	185
	4等	170
大尉	1等	155
	2等	137
	3等	122
中尉	1等	94
	2等	85
少尉		70
准尉	1等	110
	2等	95
	3等	85
	4等	80
曹長	1等	75
	2等	70
	3等	35
	4等	32
軍曹	1等	30
	2等	26
	3等	23
伍長		20
兵長		13
上等兵		10
一等兵		9
二等兵		6

戦地や満国境の部隊の将兵には、この他に特別手当が支給された。



昭和18年3月10日 陸軍記念日 老田庵教育隊 宿舎前にて (筆者)

走る幅50mの谷を挟んで、敵と対峙した。防衛戦術上各陣地は、塹壕で結び要所にはトーチカを配置したが、鉄帽が塹壕から頭を出すと透かさず敵は狙撃した。銃声のない日はなく、時には追撃砲弾や山砲弾が附近に落下した。当方も随時火力急襲を行い、その銃砲聲は霸王城全山に轟いたのである。

一、風が吹く夕靄、霸王城の残光を受けて丘に立ち見渡す平野、鄭州の孤城落日夢淋し  
二、森林にチラホラと

私は昭和十七年十二月一日付で少尉に任官、予備役に編入された。MG・biaの第一線陣地の配備が終り一段落すると、初年兵教育の教官に任命された。教育隊は、北岸の鉄橋に近い老田庵という集落で、接収した家屋は泥壁造りであった。

ここで霸王城の由緒について考察してみよう。前漢時代、複数の王朝漢楚兩國は、秦を滅ぼした後、対立して天下争奪に明け暮れ、黄河河畔では東西に走る谷を境に、東に楚王項羽(BC.二三一-BC.二〇三)、西に漢王劉邦(BC.西七-BC.西二)が城を築き、この地で天下を二分した。項羽は、自らを霸王(武力権謀を用い国を治めた者)と号し、彼が築いた城に霸王と名付けたのが地名として残ったのである。

だが戦争はもうご免だ。歴史的评价はどうあれ、隣の国へ出かけて行って殺戮を繰り返す、部落を破壊、焼き払いました。この戦いが侵略の歴史であったとは夢知らず、雄大な中国大陸の夕映えを背に受けて、毗を決心唇を噛みしめ、黙々と前線へ向かった兵士たちの姿も、やがて歴史の彼方に埋め込まれてゆくことだろう。(了)

花門の兵舎は、黄土の崖を削り抜いた洞窟(中国人の住居で窟洞という)である。洞窟兵舎は、夏涼しくて冬暖かい、合理的な住居であった。照明は石油ランプ、風呂は甕風呂である。ロバが井戸のまわりを円型に回る揚水風景は、都市では目にするこの出来ない牧歌的な美しさがあった。

トーチカ陣地が仄見ゆる 大和男の髭面は 意地と度胸の苦走り やがて時来りやひた 真っ先駈けて洛陽へ 戦勢三百乗り越えて 重慶チベット何のそ

流れ、そんな中に苦楽を共にしてきた青春の群像があり、光と影を映してきた河南の風土があった。第一期の検閲(検閲官栗栖隊長)が終り花門へ帰ると再び陣中勤務である。

中国での生活は、私の青春の一頁どころか十頁二十頁であった。茫洋とした風土感、中国風の生活スタイル、そして軍隊生活と戦場という視座を覚えてくれた。終戦から五十年、時代が変わり世代も交替した。

十 結び

# 酒匂と言う地名の

## 起こりについて

川瀬 春雄

### 一 相模風土記の

#### 記述について

町の多くの人がある日常  
生活の中で、ふと自分の住  
んでいる土地の名に疑問を  
感じ、そして自分なりにい  
ろいろと解釋してみるとい  
た経験を持っているのでは  
ないだろうか。  
酒匂さうがと言ふ地名がいつ頃

酒匂川 小田原大橋より



どの様な理由から生れたの  
であろうか、この問いに対  
してここに長く住む土地人  
も何の答を持っていないよ  
うである。酒匂の二字を以  
て「さかわ」と読んだのは  
どのような意味を持ったの  
だろうか。わからないなが  
ら、その裏面に何か歴史が  
秘められているのではない  
だろうか。平

安末期あたり  
から歴史を持  
つ酒匂のこの  
事について、  
先人はどのよ  
うに解釋して  
いたのである  
うか。  
江戸時代末  
の幕府官撰の  
『新編相模風  
土記稿』(以  
下風土記と略  
す)によると、  
足柄下郡酒匂  
村の頃の冒頭  
に次の様な事  
が記されてい

る。

相伝う、日本武尊東夷征  
伐の時、龍神へ祈誓ありて、  
今の酒匂川へ神酒を注ぎし  
かば、酒の匂ひしばし止ま  
らざりしを以て遂に地名  
になれりと。これは全く匂  
の字を匂に誤りて、憶案を  
加へし説なり。又伝う、東  
海道側なる民家の前に、幅  
三尺許なる小溝あり。この  
水西へ逆流する故地名とな  
れりと。之も信據となし難  
し。按ずるに海道記に道は  
順なれども、宿を逆川と言  
ふところに泊る。汐のさす  
時水の上さまに流るれば、  
逆川と云ふ云々。こは今の  
酒匂川を云ふなるべし。こ  
の川当所にて海に入れば、  
潮水逆流せし事もあるべし。  
今は絶へて逆流せず。然れ  
ばこの川に因つて地名とな  
りしか。又按ずるに、物茂  
卿の南留別志に岸和田、岩  
和田、佐川田など地名にわ  
だと云うは、曲の字なるべ  
し。海川の曲り目なりと見  
ゆ。当所も酒匂川海に注す  
る処、地形湾曲をなせり。  
且つ酒匂の匂の字は匂の俗  
字にして、説文に匂は曲り  
なりと註し、……中略……  
村名に匂の字を用いれば、

もと水岸の曲りたるより起  
りて「さかわだ」と唱ふべ  
きを、下略せしも知るべか  
らず。

(一)日本武尊伝説 風土記も  
軽く一笑に付しているよう  
に、あちこちにみる「弘法  
の井戸」伝説や日本武尊伝  
説等はそれ程珍らしくない。  
偉大な宗教者とか英雄に対  
する民衆の憧れ尊敬の心が  
この様な伝説を生んだので  
あろう。

(二)東海道側の小溝さき川  
説 風土記に言う東海道側  
の小溝とは、確かに昭和三  
十年頃迄国道の山側を流れ  
ていた。田植時は、特に水  
量が多く、少年の頃小魚な  
ど採つて遊んだと語る人も  
多くいる。今は、国道の拡  
幅工事によってコンクリー  
トに覆われ、歩道となり、  
小溝の姿は全く見る事はで  
きない。今この小溝の上流  
を辿ってみると町の西端、  
法船寺の前から一号国道の  
山側を東へ約四百米の所で  
国道から北に折れ、大蔵省  
印刷局工場の西門の前を過  
ぎ、東海道線を横切つて登  
山フラワーセンターの三十  
米手前で酒匂堰から分流さ  
れていたのである。この小

溝は、昭和三十年頃迄水田  
の灌漑用に残つた分の水が  
下流の町中を豊かに流れ、  
町民の生活用水として必要  
不可欠のものであったとの  
事である。

この小溝の流れは、町の  
西端法船寺の前で菊川へ流  
れこんでいたが、小溝の水  
位と菊川の水位は、約一、  
五メートルもの落差があつ  
たので(海抜四・五米「菊川」  
汀線より二百米)、菊川の水  
がこの小溝へ逆流する事は  
有り得ない。風土記の説の  
ように、逆流したとすれば、  
西から東へである。この小  
溝は、その本流が幅約五米  
の人工川の酒匂堰であり、  
従つて、小溝も灌漑用の人  
工川である。酒匂堰は、慶  
長年間に造られたものと言  
われ、今の松田町で酒匂川  
の水を分流し、金子、大井  
等の村々の水田を潤しなが  
ら南流し、最下流の酒匂村  
の北部で東に折れ国府津の  
親木橋おきなはしのあたりで森戸川に  
流れこんでいる。このよう  
な慶長年間に造られた人工  
川の逆流を以て地名の起り  
と考えるのは年代的にみて  
も不合理と言わざるを得ず、  
風土記もこれを信ずるに足  
らずとしている。(続)

## 遺稿

## 露国・日露の役俘虜のこと(七)

## 八十七年ぶりのお礼後編(一)

文と絵

隠岐威重

## 動機

鳥蘇里江と題した拙文

『小田原史談』一四一、一四三、一四四、一四六、一四七の各号)

の中で、旧満洲領、三江省の周辺の今回の敗戦の記、

特に残留婦女の生きざまを写していった。その筆が、

遅々としてではあるが進んで行くうちに次第に次に誌すような気持ちになっていった。

満洲の東北の隅、三江省辺はあの大陸でも大僻地である。多くの遺婦、遺児が出た大変に寒い、じめじめした嫌な地方だ。

やっと二十歳になったばかりの娘、新婚の翠子が夫の戦死後唯一人、ソ満国境を分けるアムール河畔の草深い沼地を三十余年も漂った様子を写していった。

が、待てよ、我々日本人にしてみれば、その辺を僻地と呼んでいるが、露国側からみると、もし黒竜江を

南に渡れば、其処は豊饒な大陸の続き、不凍の海に面するユートピアの地だ。国として南下し、その地を得れば永年の問題、食料等の不足は十分補える。

だが、そんなことを仕出かせば、一つ二つの大戦争でも覚悟しなければならぬ大問題だが。

老人の考えている事は違う。国としての南下策ではない。あの寒冷の地に住む人達、個人、個人は南に対してどんな気持ちを抱いているか。その願いの様を知りたいと思っているのだ。

アムールを渡って北の故郷をふりかえると、また、寒い故郷が懐かしくなるかも知れない、とかそんな気持ちを知りたいと思ったのだ。

昭和四十年代の末の頃、老人は、秋田八郎瀧に近い地の工場の管理をしていた。不況の風吹く中で、単身で嫌な生活を送ったことは前

に記した。

その頃、休みの日など、無聊を消すためによく秋田の中心街に遊んだ。バスに揺られて行くと、秋田の外港、土崎港辺にかかる。その港は、日本海を挟み、ソ連の北方木材を受ける港でもあった。港のヤードには、北の国の針葉樹の丸太がうず高く積み上げてある。

バスが中心街へ行くのに平行して、ソ連の船員、数名の若者達も行く、そんな群を何回も見た。彼等は決してバスに乗らぬ。街迄十キロ近くを歩くのだ。

聞けば、彼等の賃金は安く、バス代を節約して歩いて行くのだそうだ。でも、歩きながら、友の背をたたき、笑い声をたてて楽しそうにしているのはバスの中からも分かった。

だが、我が国の捕虜が露国に送られていたことは知らなかった。あり得べからざる事と思ひ込んでいた。露兵の捕虜が八万、日本のそれが二千。数の上では大差があるが、まさか日本の捕虜がそんなに居た事も知らなかった。後の戦争で無理矢理詰め込まれた「生き

て虜囚の辱めを受けず」……『戦陣訓』の教えの賜か、不明を恥じる。でもいい、数など。

日露両国共、あの戦争では俘虜を優遇した。優遇し合ったと云っていい。それを、俄勉強で知ったのだ。それは何故だろう。その動機の方に興味を湧いた。

それに比べ、その後約四十年の今次の大戦では、ソ連のシベリヤ等での捕虜の虐待、酷使の事は論外だが、我が国も劣らず、戦中戦後に俘虜虐待の大悪行を犯してしまった。

時が経つにつれて、人間は進歩し、少しは利口になると思っていたが、結果は逆だ。大後退と云った方がいい。また、つまらぬ事を云っていると話が進まない、日露の役に戻ろう。

## 日露戦争に於ける

## 捕虜の扱い

明治帝の言葉から、日露の戦いに臨む直前、帝は、その詔勅の中に、日清の役と同様、「凡て国際条規の範囲に於いて一切の手段を尽くし遺憾なからしむことを期せよ」の一文を含む開戦の詔勅を發した。この事

は、一般的に戦時の国際法の遵守に配慮する事を示すと同時に、特に捕虜の取り扱いに意を用いる事が大きく含まれていたのだ。

露国側から話を進める。露国は、ハーグの万国平和会議の裁判官で、屈指の国際法者のF・F・マルテンスを俘虜情報局長として国際法の遵守に務めた。後にマルテンスはポーツマス講話会議の露国の代表も務めた。その講和の席でも我が国の捕虜の処遇を高く評価した。露国のそのような姿勢は、ラストエンペラーになるニコライ二世の考えに負う処が大であった。

ロマノフ王朝の最後の皇帝になる彼は、国内で貴族・農民・農奴の上に専政帝として立つとは別に、国外では、高い理想による博愛を旨とし、人類愛を掲げて万国平和会議のハーグでの開催に力を尽くした。消え去る者が何か世に残す気持ちが強かったのかも知れぬ。

一方、我が国では、マルテンスに対するに、国外でも著名な国際法学者有賀長雄を立てた。有賀を満洲総司令部大山総司令官の首席法律顧問として万全を期し





捕虜と看守

た。有賀は、旅順開城に当たって、直接開城規約の起草に、また、交渉にも当たり、捕虜の待遇について国際法にもとることのないように軍人を指導した。それに、第一軍黒木大将の下には、少壮学徒蟻川東大教授を配した。軍も直接戦闘に当たる部隊の将校の教育にも力を尽くし、多くの書類、手帳を発刊した。それにより捕虜の処置、処遇の手引書にした。

それら、書類、手帳を後の代の進歩的学者、作家の小田実が読み、当時そんな手帳が兵の末まで配布されていたことを知り驚愕の声をあげた。「軍隊手帳」？、

一見すると軍人勅諭とまぎらうような小冊子に、捕虜の取り扱いが噛んで含めるように記述してあったことだ。大東亜戦に臨んだ軍との違いを知って驚いたのであろう。

また、森鷗外も、ドイツ駐在武官の席から赤十字国際会議に通訳として出席し、その職務を越えて大活躍した事もつたえられている。では何故、我が国はそんな努力をしたのだろうか。日本軍の捕虜優遇には、戦略的な哀れな狙いがあったのだ。国際的にルール、秩序、信義を守る国であることを示し、欧米諸国の好意と支持を得ようと、また、外債

の販売促進をねらった。

有利な条件  
あわよくば不  
平等条約の撤  
廃など遠大な  
計画も含めて  
いたのだ。

ナイチンゲール  
の博愛の精神  
からみれば、  
次元の低い狙  
いかも知れない  
が、当時の  
我が国の力で

は最高級の理念の姿を借りて、低次の願いを通そうとする哀れさは止むを得ぬ。それより、その奢りの小ささを汲むべきだろう。

戦いは日本軍の思わぬ大勝であった。露東洋艦隊に属する巡洋艦ワイヤーク号・砲艦カレーツ号が朝鮮仁川港外で瓜生艦隊と砲を交え露二艦は撃破され、多くの負傷者が出た。だが、この交戦は、戦線布告一日前のことで、正式には俘虜とされず戦傷兵となった。

だが、同年三月八日開戦後一ヵ月もたたぬ時に、第一陣として松山捕虜收容所に入っていた。

- ・次(に)会戦地別露国の捕虜数を示す。
- ・九連城付近  
(明治三十七年五月上旬)  
陸戦 五七三  
(将校二二、兵五五二)
- ・得利寺付近  
(同年六月中旬)  
陸戦 四八五  
(将校七、兵四七八)
- ・檜樹林子・様子山領付近  
(同年七月下旬)  
陸戦 一〇二  
(将校九、兵九三)
- ・蔚山沖
- ・遼陽付近  
(同年八月十四日)  
陸戦 一、一二七  
(将校九、兵一、二一八)
- ・沙河付近(同年十月中旬)  
陸戦 三八一  
(将校二六、兵三五五)
- ・旅順開城(同年一月五日)  
陸戦 三四、四九〇  
(将校九四〇内将官一四  
兵三三、五五〇)
- ・奉天付近(同年一月五日)  
陸戦 二〇、七三二  
(将校二七四、兵二〇、  
四五八)
- ・日本海(同年五月)  
海戦 六、一〇六  
(将校三九六、兵五、七  
一〇)
- ・樺太(同年八月上旬)  
陸戦 四、六九八  
(将校二〇七、兵四、五  
九二)
- ・その他 五八一  
(陸将校二二、海将校二、  
兵五五八)
- ・総数 七九、三六七  
内陸将校 一、四二四  
海将校 二、二四七  
将官陸 一七  
将官海 七

以上八万人近い露兵が、全国二十九箇所の收容所に入った。

人が集まれば色々事が起きる。まして風俗・習慣の異なる遠い異国に、しかも俘虜として自由を制限されては、捕われた側、收容する側も共に。

でも日本は俘虜を優遇した。前期の如きやや低次元の魂胆があったとしても。俘虜側も、捕虜条約を充分有利に解釈し、白人特有の強い自己主張を織り込んでいった。捕虜收容所を写す諸々の書籍を読んでいると「こんな勝手な事を云いやがって、勝手な奴等だ」と遂に日本人の悪い癖が出るが、それを我慢して、大望の為に、お国の為だと腹の虫を押さえていったのは、老人でなく、当時の收容所関係の人達だったのだ。

その結果、我が国の捕虜対策は、各国間で高く評価されていた。「マツヤマ」「マツヤマ」と唱え、松山を降参の白旗と同意語として投降してくる露兵もいたとか。松山收容所の名は高く、その優遇ぶりも露兵の間に拡がっていたのだ。

## 生かされて

## 私の軍隊体験 (3)

## 磯部正人と

## 戦況の変化と共に

## 北満を転々と(2)

やがて夏が訪れました。湿地演習が始まりました。

ここ虎林から国境寄りに行くとは殆どが湿地帯です。当時日本軍が仮想敵としていたソ連に攻め入るには、どうしてもこの湿地帯を通過しなければなりません。湿地帯は、車輪のついた車輛は勿論のこと、キャタピラの付いたものでも絶対通過不能なのです。

だから我々の迫撃部隊は、トラックによる移動が出来ませんので、砲を砲身と脚と床板の三つに分解して湿地帯を渡るのでした。トラックが使えないため、自動車も砲手と一緒に運んで運びます。湿地帯にはヤチボーズと云って一人で手で抱ける位の小さな島みたいなものがあります。この上は固いので、源義経の八幡跳びよろしく跳んで行けば、埋まらずに濡れずに進めるで

しょう。しかし、実際には四十キログラムもある重い兵器を肩に担いで、不規則に点在するヤチボーズの上を跳び渡ることは不可能なことです。だから腰まで又或る時は胸までつかりながら、肩に兵器が喰い込む痛みと足をとられる危険と闘いながら進め進めです。

朝から晩まで演習は続きますので食事は、ごはんを干してパラフィン袋に詰めただけで、確か糞と呼んでいました。これに若干量の水を入れておきますと丁度昼食に食べられるようになります。毎日これが昼食になっておりました。こいつを腰までつかりながら食べ湿地帯に耐えたものでした。湿地帯でも浮動湿地と呼ばれていた処は、所謂底なしの最も危険な所で、此処に入ったら先ず助かる見込みは無いと云われていました。幸にもそんな所を経験しなくて良かったと思います。

こんなつらい演習を重ねながら、季節は移り変わり、短い秋が終る頃、正確には昭和十七年十一月一日、私は、本来の任務である自動車の整備術講習の受講のため、以前駐屯した富拉爾基にあっての関東軍化学部練習隊に派遣されました。同じ第二中隊隊列班から確か鍛工術講習受講に行った齋藤貞明兵長(現在横須賀市にて会社経営)と二人でした。

足回りは勿論でしたが、特に車の心臓部であるエンジンの分解修理組立を主に勉強いたしました。クラシクのメタル攪り合せ、ピストンリングの交換、吸排気弁の攪り合せ、キャブレターの分解修理組立等々を終り、エンジンが始動した時の気持は非常にうれしく、今でもその時のうれしさが甦って参ります。

段々と面白みも加わり勉強にも熱が入り、六カ月の修業期間が終った時、整備科を無事卒業いたしました。斎藤兵長も鍛工科を首席で卒業、昭和十八年四月末に原隊へ帰ることが出来ました。

修業期間中は、寒い時でしたので、日曜日には宮庭

に水を張り凍結させて、スケート靴をはき練習した楽しい思い出があります。

帰隊後間もなく陸軍伍長に任官いたしました。昭和十八年七月一日のことでした。この頃になって、ようやく初年兵が入隊して参りました。私は既に満期除隊になっているのですが、戦時中のため一年延期になったのです。すなわち満三年勤めないと満期になりません。私達が入隊した時のこの存在だった三年兵も、昭和十七年の春に内地帰還しましたし、入隊した時の二年兵も昭和十八年の春に内地帰還いたしました。まあ、それは、とにかくとして、丸二年余り初年兵を勤めた訳です。でも二年目は一年目に較べて非常に楽になったことを覚えて居ります。

内地からの初年兵は、現役兵ではなく補充兵でしたので、年齢的には我々より上の人も居りました。でも初年兵に違いありません。一から出発して鍛えなければ一人前の兵には仕上がりにません。一人前にならないと戦場で真っ先にやられてしまいます。自分が

生きのびて無事故郷に帰る可能性を少しでも大きくするために、辛抱強くきびしい訓練に耐えなければなりません。

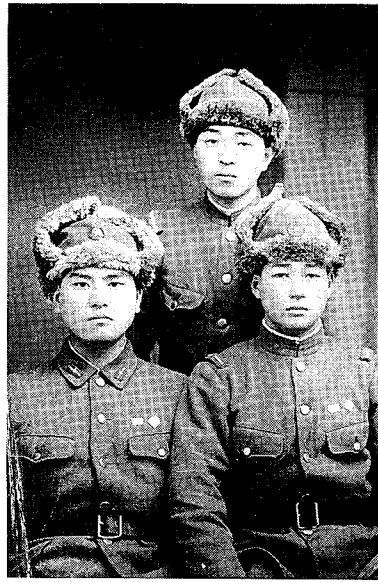
昭和十九年の夏頃だったと記憶しておりますが、最も最前線の国境警備の任に就くことになりました。屋根だけが地表面に出た穴倉兵舎での生活です。訓練は毎日あります。昭和十四年徴集兵は既に内地帰還除隊して、我々十五年徴集兵が部隊の主力です。

私は、部隊が国境警備に就いた五カ月前に、即ち昭和十九年二月末に第二中隊車輛係下士官及び車輛班内務班長としての勤務に就いておりました。いろいろな勤務の中で車輛二乃至三輛を引率し、又単独の時もありましたが、警備隊と留守部隊との間を往復して弾薬、被服、糧食等の輸送任務にも就いておりました。

昭和十九年の短い秋も終り、何処を向いても全く四方真白の雪景色となりました。雪の積った道路をチェーンを巻いて走っていますと、キジが二羽三羽と餌を探しておりまして。徒歩ですと五十米も近づくと、独特の

飛び方で激しい羽音を残して逃げたのですが、不思議に車ですと、四〇五米の近くまで行っても逃げないのです。一寸理解出来ないことですが事実なんです。輸送任務に就く時には、必ず三八式歩兵銃を携帯してきますので、運転席の側面ガラスを開けて銃口をのぞかせ首か頭をねらい撃ちます。大抵の場合、撃ち損じることは有りません。部隊に持ち帰ってキジ刺でいただきます。大変軟かで美味しかったです。

たことを覚えて居ります。今想い起して見ますと随分無惨なことをしたものだと思えますが、当時は余り気に留めませんでした。又、日曜日など演習が休みの日には、中隊で或る区域を包囲して、大声を出してキジを追いつてますと飛び立ちますが余り長い距離は飛ばせないので、繰り返して追われている中にキジも疲れ頭を雪の中に突っ込んで動かなくなりまます。昔私達が小学生だった頃のカル



迫撃第十三大隊第二中隊で良き戦友だった三人。中央 橋本伍長(当時)は、開戦時の戦争で戦死され、右端の近藤伍長は、川口美春中隊長(高知市在住)と一緒に他部隊に転属。終戦後南方より復員するも、昭和六十二年一月惜しくも死去された。左端は私

この写真は昭和十九年二月十五日、虎林の街で撮ったもの、近藤氏が保管されて居たので複写し、昭和二十九年九月私宛に送付されたものです。変わらぬ友情に感謝します。

夕に「頭かくして尻かくさず」と言うのがありました。が、全くその通りの光景でした。頭を雪中に突っこんだキジは手づかみで捕獲しました。はげしい訓練の合間には、こうした楽しい思い出もありました。

前後するかも知れませんが、昭和十九年夏、国境最前線にある監視哨勤務の任に就いたことがあります。二百米も行くところスリー川で向岸はソ連領ですので、ソ連軍の兵舎や監視哨等がはっきりと見えます。ソ連兵の姿や女性も見えます。将校の夫人が女袴軍医でしょう。

哨長の私、以下五〇六名だったと思いますが一週間の勤務でした。毎日うだるような暑さには全く閉口でした。でも大陸性気候ですから日陰に入れば涼しいのです。内地のように海洋性でしたらむしろ暑いのですが、その点幾らか助かったのです。

それはともかく、立哨勤務一名と哨舎に二名残って、他は小川に飛び込んで暑さを凌ぎをしながら、鯉とりをしました。収穫は晩のおかずになりました。副食物は充

分あったのですが、やっぱり珍しい物が食べたいのと、鯉をとる楽しみ、そして暑さを凌ぎと一挙三得をねらって交代で行ったことを覚えております。

或る日、余り夢中になっていた巡警将校が来たのに気付くのが少し遅れて気まずい思いをした事がありました。その場では何も言われなかったのですが、勤務終了後、部隊帰隊時に部隊副官に注意されて陳謝したことがあります。このために、同僚の橋本進二伍長(横浜市出身・戦死)や近藤正男伍長(小田原市在住・昭和六十二年一月死去)は二十年一月に軍曹に昇進したのに、私は一ヶ月おくれで二月に軍曹に昇進したことを覚えております。

昭和二十年の正月を迎えて間もない三日に痔の手術のため虎林陸軍病院に入院しました。翌日手術を受けましたが、下半身麻痺でしたので頭の方は確かで、手術台の上の天井近くに取り付けられた鏡に私の下半身が写っているのが、はっきりと見え、坂田軍医大尉の執刀で腔門の患部が抉り取られる様子を目のあたりに

見ることが出来ました。手術も無事終了、看護婦さんから麻酔が切れ始めると焼きつくような痛みがありますよと脅かされましたが、幸にもそれほど痛みも感じませんでした。三十代の看護婦さんでしたが入院中、大変よく面倒を見て頂いたことを感謝いたします。終戦後如何なされたでしょうか。無事内地に帰還されて居ればよろしいですが。

二月始め私の傷も癒え退院して原隊復帰をいたしました。この頃になると、私達には何も聞かされていなかったので、南方戦線の戦況が余程悪いのでしょうか。どんどんと同僚或いは部下の兵隊が転属して行きます。そして時々補充兵が主として在満者が召集されて入隊して来ます。それで古参兵が減り何も知らない判らない新兵が多くなり、質が落ちて部隊としての精強さが失われて行きます。(続)



# 岩がら瀬吊橋

## 三谷 喜久満

### 吊橋墜落事故

昭和十三年(一九三六)十一月一日、突然酒匂川の岩流瀬橋墜落の事故が起きた。

第一報によれば、今日遠足

に出掛けた川村小学校の一年生が吊橋を渡っている時に橋のケーブルが切れて多数の生徒もろ共、酒匂川に落ちたと云うのである。当日私は丁度家に居った。俄かに町の通りが喧騒になったので、何事かと飛び出して行って街に出ている数人に情報を聞いて兄に伝えた。これは大事件である。末弟の満は一年生で今日その遠足に行っている。絶対にこの事故に巻き込まれたと思っ

た。さて、これについての記事は、兄の三郎が当時の模様を独自の筆致で書き残しているのので、私が書くことはないと思う。よって原文を次に掲げる。

その日は薄ら寒い雲が灰

色に拡がり、何かしら憂鬱な日だった。吾が家ではオヤジもオフクロも留守だ。丁度あけ番で今夜帰ると言う日だ。

(中略)

キクマは高下駄をはいて章駄天の如くガラゼなる処へ走って行き、ユウコが木綿紐でタスキをしたまま、目をつるし上げてミッチャんがフギアフギアと言いな

がら家へ帰って、何処の河原だか知らぬが河原へ行く

と張りきって居る。気持ち落ち着かせようと、病気で寝巻着姿の私は、これは何とステッキをもって家と火の間をいったりきたりしていた。外では、あれ家の子はど

うしたらうと、フラフラと、さまよい出たと言った台所

き、街の両側にはこれらの顔があせり出した頃、自動車

が医者をのせて行き、トラックが、面白がってこれを追

り、オートバイが、自転車がとんで行く。やれやれと思

った人々の顔が、街角に砂塵をのこし姿がなくなると、再び絶望的な目の色して東の方をみてる。

あんなに楽しみにしていた遠足、キャラメル、オセ

ンベ、カキ、リンゴ、ミカン、ピース(子供の菓子)、

あのおにぎり食べただろうかと、母は無性に子が可愛

くなる。オヤジの居ないとき、なんてことだろう、と出征兵士の妻は着換えをもつてハイヤーをとばす。それが出来ない多くの人達の怒りは妙にこぼれるのだ。

「チクシヨーあの青二才の小僧っ子先生たちも面白くないと思

ったよ」「ワシニャに、あのアマッコ家の子をどうしやがった」とか、「もしかの

ことであつたら校長かみころしてやる」と発

展する。実に最も癡猛な人種はオカミさんである。それ程子は可愛いし、生命は大事な

ものなのである。口もろくにきいたこと

のないオカミさんから話しか

けられたり、話をきいたり妙に隣近所

が仲よくなるものだ。情報がぼつぼつと入り、人々が家の子は無事だと判ると、今迄しゃべったことをさげすむように笑って家に引きこむ。だが吾々ミツルは中々帰らない、さて何組だったかも人にきかれて判らない、何でも女の先生で女と半分半分の組だつて、あゝじゃ二組だ。いやその二組が橋を渡つてるときだ

そうだ。やれやれと人はまるでおくやみに来たような顔して後ずさりして行ってしまう。此処に於てかサブ

ロは、ますますそのにぎるステッキをかたく、むずかしい顔して火の見と家の間

を往復するのだ。

さて、ミツルが口の端に

打撲サツカ傷を負ったが、

武運長久、キクマにまたがり

りサツ爽とガイセンした。やれやれと、腰から下ぬれた

服をぬがして熱が少しあるのでそつとねかせたのは

三時すぎだったか。何とよく寝ることか。小さな魂を

氷の如く冷たくしたまましばし

呆然としたことだろう。一方

キクマは高下駄の章駄天、その

速度の早からざるにゴーをにやし、人の自転車のケツにのつたとたん

に川の中へジャブン、東部信号所の裏だ。ともかく騒

ぎ多し。人の世の習いならん。だがこれで終わったと言

うわけでない。天気はよくなかったが歩く

鍛練遠足日よりだ。河原でたのしい子等の屋敷もす

んで、もうじき解散だと思

う先生等も、子等のたのし

さに思わずほえんだこと

だろう。四、二、三、一の

順列で二が渡つてるところ、

墜ちたらしい。坊主共は、

クニヤクニヤゆるめるこの動

揺と仲間の姿に興味をもつ

たものらしい。向こうとこ

ちの端でヨンヤサ、コラサ、

エッサ、コラサとやつつけ

たものらしい。

制限交通の吊橋だから何

でもとう。鋼策は蛇の様に

からむ。水の中へザルから

いもでもあけるように子等

は墜ちる。何事だか判らな

い。泣くひまもない。原因

も結果も何も判らない。夢

中ではい上がって焚火にも

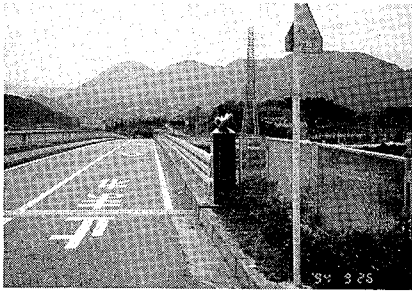
あたらず震えてたと言うの

だ。キクマの表現によれば

オサルの様な顔してシヨ

ンボリしていたと、けだしほ

んとだろう。



現在の岩流瀬橋

死者も重傷者もなく、不幸中の大幸であった。世は、聖戦下、子は国の宝である。鍛練遠足ばかりの今日。こんなことあっては子をもつ親、実に心配である。あつてはならぬ。これは当たり前である。世の木鐸たる新聞は、警告的に被害は小さかったが、事件を大きく一面に堂々と出した。いいことだ。上州の姉は電報をもって紹介して見舞ってくれた。父はその返事に気をつかう次第。

次の日、学校を休ませた。口がはれて飯が食えない。飯を食べないものを歩かしてやるわけに行かぬ。昼さがり、町長、校長、教育会長、学医がやってきた。町のオールスターキャストで

あり、空前絶後のメンバーだ。校長が県へ行ったとか、ごもごも言ったが、いやだもうこんないたづら小僧をおあずけして大変でございとうとオヤチに慰められ安心して帰って行った。

そのあと、ワダリツコ先生が実に困ったような顔して家の玄関に立った。アノーと言ったとたんに、どうも貴女もこんな小僧あずかって大変でしょうと言われ、校長一行が来たことも言われ、アラーと言って最敬礼して帰っていった。

けだし、ミツルの言によれば、オイラの先生水の中の石の上で上着をぬいでみたりばかりしてたそうだがこれもほんただろう。新聞は、父兄の方が恐縮しているので県では処分しないと報じている。

岩流瀬吊橋の由来

ところで墜落したこの岩流瀬の吊橋は、当時足柄上郡北足柄村内山(南足柄市)から川村の岸(山北町)や山北方面へ出るには近道の便利な吊橋であった。しかし、この吊橋は距離が長く幅員が狭い。人が物を持って渡る程度の貧弱な吊橋で

ある。だから馬を引いてはとでも通れない。恐らく天秤棒で重い荷物を担いで運ぶことも上下の動揺が激しくなるから無理の筈である。要するに空身の人の通行するだけの橋であった。

さて、ここで話は変わって、私の一家が父の転勤に伴って足柄上郡清水村(山北町)の谷嶽鉄道官舎に住んでいた時のことだった。清水村川西(山北町)の富士水力発電(俣峯下発電所)の所長で山科義夫と仰る方が居らっしゃって、その息子さんの清さんが小田原中学へ通っていたので私の兄と交際が深かった。私はいつも金魚の糞のように兄に付いて歩き、屢々山科さんの社宅へお邪魔したものであった。その清さんが大学を出られ、三菱重工業の名古屋航空機製作所に就職された。昭和二十年の敗戦後は財閥解体のマッカーサー指令により、いろいろ紆余曲折はあったけれど三菱重工の名古屋航空機製作所は復活し、山科清さんは同所(所長東條輝雄)で品質管理部長、資材部長、中小型機部長と逐次要職を歴任し活躍された。現在では系列の

関連会社の重役をも退任されて、今千葉県木更津市に於て晴耕雨読、悠々自適の生活を送られている。

ところで平成元年八月のことだった。実にひよんな事から岩流瀬の吊橋が私と山科さんとの間で話題となり、山科さんは本当に懐かしそうにその吊橋が架けられた由来を克明に物語って下さったのである。私はその話は今までに聞いたことがなかったので感激して聞いた。その話のあらまは次のとおりである。

時は大正末期であった。酒匂川水系の水力発電所建設工事は急ピッチに進み清水村の峯下、嵐、川村の山北(以上山北町)、北足柄村内山の各発電所と順を追って建設が進められて来た。清さんのお父さん、山科

義夫さんは峯下、嵐発電所の建設を手掛けられて、続いて山北、内山発電所を完成された。当時の発電所は現在のように無人発電所でないから、発電所の運転には可成り多くの要員を必要とした。その為発電所の隣接地に社宅を建設して従業員を確保したのである。当然のことながら内山発電所

にも社宅が出来た。この発電所は北足柄村内山の部落から二軒も離れた岩流瀬の芦の繁った原の中で、所謂陸の孤島であった。従って社宅の人は山北駅付近の商店街へ買物に出るには、内山を経て平山から足柄橋を渡って山北へ約四軒余りの道程を歩くのである。当時川村の山北は鉄道の町として殷賑を極めていたから生活用品は潤沢にあり、山北駅付近の商店街へ来なければ、どうしても用を足せないであった。

内山発電所の社宅は岩流瀬で酒匂川を越せば対岸は川村の岸部落で山北へ近いから、内山の社宅では是非此処に橋が欲しいところである。と云って此処は水量が豊富であるから歩いて川越しは出来ないのであった。

ここで所長の山科義夫さんは北足柄村役場に足を運んで、岩流瀬に吊橋を架設するよう再三再四に亘って交渉した。吊橋が掛かれば社宅の人のみならず、内山の村民も頗る便利になると訴えたのである。しかし、当時の北足柄村の経済事情は火の車で、再三の交渉にも拘らず埒が明

かななかった。山科さんは止む無く意を決し、大正十五年夏会社単独で架橋することにした。吊橋のワイヤーケーブル及び鋼線、両岸の鳥居型支柱の柱は全て発電所建設用資材から上面した。たまたま丁度その頃から送電線の電柱の木の柱は鉄塔に移行したので大量の木柱が余剰材となって野積されていた。その木材の一部を製材所で製材し、橋の床板の敷板や床材に用いたのであった。人件費は建設費や災害復旧費等から捻出したものである。とにかく、曲

りなりにも吊橋は出来た。今思えば大正の時代であったから吊橋は出来上がったのだが、現在ではとてもいろいろの法の規制があつて大変である。この吊橋が出来たことにより、北足柄村の内山部落と川村の岸部落並びに山北との交流が活発になり、橋を渡る人が多くなった。勿論社宅の人は孤島の生活から開放されたのである。或る時のことであつた。内山部落の血気盛りの若い人達が、六・七名吊橋に集まって、橋を揺するのが面白

いからか、この橋に対する嫌がらせか、発電所建設の恨みか判らないが盛んに橋を揺すり出した。この状況を遠く発電所前から見付けた山科さんは烈火の如く怒り、韋駄天もかくやと思つて速さで駆けて行き、橋に屯していた若い人達の中へ徒手空拳で飛び込んで彼等のわるさを制止した。山科さんは身体は比較的小柄だが剛毅で、鬼神をも拉ぐ猛烈な気迫に度肝を抜かれ、道理の通つた力強い叱咤に返す言葉もなく若者達は退散したのである。その時以

来、吊橋に対してのわるさをする者はなかったと言ふことであつた。しかし、この状況を社宅の前から見ていた清さんは、一時はどうなることかと成り行きを見守つて心配していたと昨日今日の如く述懐されていた。そうした物語のあるこの橋は、谷を吹き抜けて来る四季折々の風と雨、そして冬の雪に晒されて十三年も耐えて来たのである。

昭和十三年十一月一日、川村小学校へ入学して半年、未だ善悪の分別のつかぬ所謂頑是無い一年生の為したる行為で脆くも吊橋の山北側の支柱が崩れたのである。折れた支柱は遠くから見ても判る程赤くもろもろに朽ちていて、よくぞ今まで持ちこたえて来たと感心する程であつた。これはとりも直さず、山科さんの村の若者達に対する道理の通つた戒めが、村の人達に伝わって橋を大事にして来たもの以外ならない。公共物であるこの橋の所属は、恐らくどちらの村のものともなっていないと思われ。発電所がこれを架設したが会社はこれを資産に計上する筈がない。県当局は、橋の墜落の責任を学童に嫁し、引いては学校側に問う姿勢であつたが、死亡事故にならなかつたとの父兄からの声で不問にしたと言ふことだ。

## 震災日記

### 片岡永左衛門

必要を感じ心より深謝せざるはなし。途中、大工神保に立ち寄り金を渡し二時無事帰宅。

辻堂駅は、近年の開駅にて、最初は停車場以外は人家も非ざりしに、今日来り見れば、数町の間は市街となり異常の発展なり。聞く処に依れば、この辺にて人氣も、近来は農村を捨て京浜に移住するもの多く、そこより日勤するもの有り、停車場付近は賑わいしに、この震災にて帰住するもの多く、且つ日勤先も中止となりしたため、却つて土地の日

なおその後この吊橋の所属と維持管理を巡つての責任の追求は何故か、新聞も、警察も、町の人も話題にならなかつた。これは矢張り時代の然らしむところであつたのだろう。(了)

大正十二年  
九月廿七日 晴  
午前八時、辻堂駅より乗車す。今日は昨日の汽車より幾分透きあり。窓より乗る者もなし。鳥井戸より降り馬入(相模川)端に至れば昨日より人少なし。三十分余りにて渡り、馬入より馬車に乗り大磯支店(関東銀行)に立ち寄る。用談を

済まし十一時の汽車に乗り、国府津に下車し徒歩。兵卒の警戒中に酒匂川の仮橋を渡る。今回の震災に就ては、戒嚴のため軍隊の急に出動し、警備は勿論、道路・橋梁の修繕、その他百般に従事せられ、住民は安堵し便宜を得し事甚大にして、軍隊は、国の警備にて、平時は無用の長物視せしも今更平時も

雇賃は幾分の下落となり、その他の事情にて一頓挫すべきかと云へり。物には中心無きは全体を維持する不能が如く、村にも町にも中心人物無きは、又、平和を持すると得ざるべし。三嘴氏は、部落に於ては資産を有し、今回も貯米三百俵を有せしかば、部

落中一軒に米一俵宛を融通し避難したため、東海道を通行する人のためには、玄米粥を攝持なし、その急を救いたり云へりか。その部落の幸福なるに、近来は各自己れの理屈を主張し、部落の主長たるべき者にも平時は敬意を表せず、却つて折に触れては侮辱すると

米三百俵を有せしかば、部

己れを高すると心得るも有るがごとし。それら行爲は、最も謹み、常々共同して中心人物を作るも心掛けるべきを感じたり。

去る廿四日、山梨(半造 神奈川県出身、陸軍大将) 戒厳司令官視察として来原し、町当局、議員、区長等のこの際に処する方針等に誠意を欠き、物資の配給公平を得ざる等を慨し、鎌倉地方の行き届きたるを談話し訓戒したりと聞くも、当地は不秩序なりしには相違無く(如何に鼻眞眼に見るも)、今回の如くに多大の被害にては、役場員も名誉職も家族の生活等にて充分に活動の余地なきは止むを得ざる事にて、町民も不平の声をきかば相互に譲歩し合うべきと思えり。

今回の震災にて城ヶ島の海上は隆起したるも、その後日を経ず又降下せりと。

廿八日 晴

横浜高田夫婦見舞いに来る。同家は倒壊、火災に逢いしも、幸いに一同無事に立ち退き、当地を氣遣い、特に銀行にて拙者座席(関東銀行小田原支店長席)は、

危険の処なるを熟知すれば、心配したるに、四日に小田原を出立し来りし者に逢いにしに、その者は、拙者と行き違いたり聞き、少し安心したるも、口を聞きしに非ずとなれば、或いは人違いに非ざるかと手紙も伝言もしたるも、なお、心配し居たるに龍夫(永左衛門孫)の来りしにて余り、安心せりと。左も有るべし。

午後帰浜を送り、酒匂橋に至り無事渡河し姿の見ゆる迄見送り、帰りは馬車に乗り帰る。夜に入り、吉田義生の長男病死通知あり。細君芳子と行く。

廿九日 晴

夜に入り吉田に悔みに行く。震災の為、提灯を持っても街路判明せず、漸う歩行す。様の変わりしたためなり。

三十日 半晴

尾崎春彦(小伊勢屋尾崎亮司弟) 横浜より見舞いに来る。

今日、町役場に材木を取り寄せ売り始めし品不足にて閉口、需要者も思う程を買わず困りたるもの。

十月一日 半晴

銀行普請場に至る。開業に付き警備隊に警戒を請求し、午後、又普請場に至り五時帰宅。

二日 雨

開業準備のため銀行建築地に至り、日没に帰宅。

三日 晴

開業時刻迄に曲りなりに事務室出来、十一時より始め、四時半帰宅。

四日 晴

八時に出勤、十一時より開店、四時帰宅。

両人(震災で圧死した孫娘の三十五日待夜、茶飯を佛前に供へ、一同佛前にて晩食。

晴れやらぬ心のなおも曇り来て夕べ淋しき虫の聲

思うともなく物思う此の頃は過す月日の数もしらねず

かなしみはいつか尽くらむまな孫のゆきしその日は五つめぐりせと

五日 晴

八時出勤、営業後、青物町震災死者追悼として、日連宗僧侶の法要し焼香すれば、他人の佛事なるも、両人の面影も思われ暗流に咽び、早々退場し、帰途床屋に寄り理髪すれば、料金二十銭なり。震前は三十銭にて頭髪、顔も洗い心よかりしに、今は洗面の水もなく甚だ心悪しきよりすれば却って高値なり。

帰宅後、佛前に焼香。細君は墓参りせりと。今日龍夫帰省の通知有りしに、少し病氣にて来らず。何となく手持ち無沙汰なり。

六日 曇

親一(永左衛門長男) 帰省、東京の談話にて夜に入るも賑やかなり。震災以来生牛肉を初めて食す、味格別。

七日 曇

親一、亮司と共に墓参ります。十時、親一帰京。夜に入り本店より来状。

八日 半晴

日本銀行より金融の了解を得たるに、拙者実印入用

の件、本店より来状なるに、汽車は、未だ国府津以西は不通に加え、国府津よりの発車数も少なきたため、二番の八時と三番の十一時などは窓より乗り込む程にて、拙者には乗車困難の由注意ありたれば、六時の一番に乘るとはなせども、その間に同自動車の有無判明せざれば、国府津迄徒歩と決せり。尾崎方(小伊勢屋)の下女先日より親類先の狩野町(現・小田原市上町)に行事となり居り、幸いに国府津迄同行とし三時起床。洋服に草鞋、提灯を持って四時に両人にて出掛けたり。これ迄の道と勝手違い、不安の凹凸の道を酒匂川端に至りしは、夜は暗く提灯の火にては遠方を照さず方向を迷いしに、前方より提灯の火影見えたれば、その渡り来るを待つて方角を定めて歩行し、仮橋を渡りしに、川水は数條となりたれば、第二の橋迄の間、路又不明となり迷ひ居りしに、又向うより提灯の来るを待ちて第二は渡りたるも、又一面河原にて困難甚だしく、止むを得夜明けを待たんと煙草を取り出しなごせしに、振り返れば後より提灯の見



# 材木屋綺談 その三

## たかた・きくせん

我が国における木材利用は、いろいろな樹種に及んでいく。松・杉・桧は誰でも知っているが、檜の利用については、余りよく知られていない。ことに近頃は檜を用いた製品を見かけることが少なくなくなった。檜は材質が重くて固いので、その特質を生かした製品が多い。しかしこれらも最近で

頃には町々に車大工と称する専門職がアチコチにあつて結構繁昌したものである。私も材木屋なので小僧の時代から大八車を愛用したから、檜の木には愛着が深い。檜材の車は堅牢で永持ちするから、車だけでなく土木用のスコップの柄や農具の

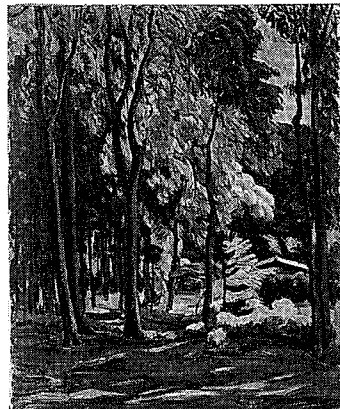
### 檜の葉はのこった

は大工が使う鉋の台を見かけるくらいで一般の人は檜そのものを知らない。プラスチックが出現するまでは、私たちは檜の製品をよく利用した。トラックが走る以前の運搬具は荷馬車、荷車である。この荷馬車荷車は、そのボディ車輪に至るまでオール檜材であった。その

鋤の柄、小さいものではハンマーの柄など馴染みの深いものである。これらを扱う商売を私たちは「樺屋」と呼んだ。その外に和船の檜は檜以外のものは使われない。小田原の海岸近くには「樺屋」と呼ぶ専門店もあつた。ところがこの檜の樹は屋

敷の樹は別として天然の群生地は極く一部に限られていた。当地方では南足柄市の道了山北面の猿山、浦山あたり、もう一つは小田原市の城山の一部だけである。今、小田原競輪場上の小田原高校に登る道の右側に、県指定の「照葉樹林地帯叢

以来、この辺非常に繁昌し雨中も往来する人多し。時も過ぎ食事の人数を掛けるのも思い、そばやに入る。来客も多し。久々なれば美味なるべしと思ひし期待の味もなし。



小田原高校の檜林 湯川治郎画

(続)

も覚えていた。この城山の檜材はことに良質でその独特の粘りは船の檣の原材として珍重されたものである。城山の檜の木の名残りは、いま小田原高校の校章の檜の葉のデザインとなつて往時の面影を偲ぶよすがとなっているのである。

(続)

いとなる如何にと思ひし淳子も、その後相愛ならず健康となり心中喜びたるも、床飾りし幸子、素子の写真を見れば、又心の暗きを覚ゆ。流石にきよは、小田原なる震災の談話毎に、顔も自ずから曇り、止むを得ざるとは云うとも、あきらめ兼ねるも、もつともにて、気の毒の思ひあり。今朝よりの疲労に九時頃床に入る。

えれば、これ待ち合し同行してようやく酒匂の村に入るも自動車はなし。酒匂の松原にて提灯を消し、走るばかりに歩行し、国府津停車場に着すれば、六時十分前なり。下女には道を教えてこれより別れ汽車に乗り込みしに、乗客は思いしより少なく、馬入にて下

車。橋を徒歩すれば橋際の仮停車場より乗車し、八時半に藤沢本店に着く。重役の出動を待ち、諸事も都合よく済みたれば、横浜の高田を見舞いにと思ひたるも、時間の都合にて泊り宿せざるを得ざれば、方向を転じ東京泊と決し、三時三十五分発に乗り、品川

にて下車すれば降雨となる。駅前より電車に乗り泉岳寺停留所にて下車。震災前は乗替券を出し何か所迄乗るも一回の乗車賃にて済みたるを、災後は乗替券を出さず、一回毎に賃金を仕拂い、その結果は値揚げと同様なり。

四谷塩町にて下車。震災



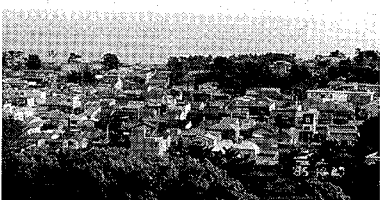
### 小田原城からの眺望



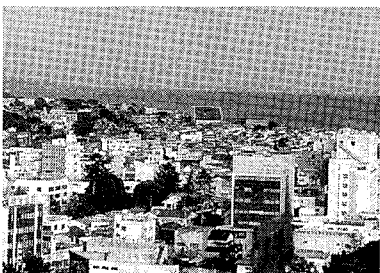
城山方面



南町から早川方面



南町方面



栄町から浜町方面



小田原駅周辺から荻窪方面

## 丹沢の植物

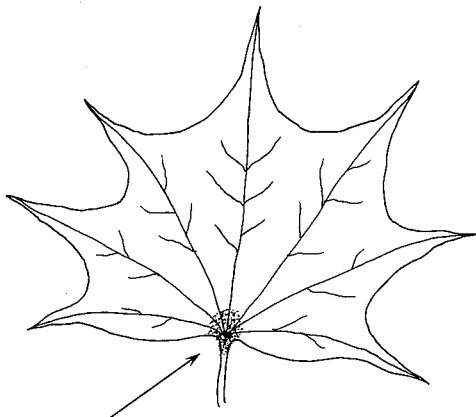
②6

城川四郎きがわしろう

楓は葉の形が蛙の手に似ていることから蛙手が「かえで」になったという。楓

の仲間は、紅葉することからみじとも呼ばれる。ちなみに楓の字は中国の

イトマキイタヤ (かえで科)  
*Acer mono Maxim. var. savatieri*



裏面の基部に褐色の毛がめだつ

筆者原図

「フウ」という植物の名前であるが、その葉がカエデに似ているために誤ってカエデに楓の字をあててしまったといういきさつがある。さて、神奈川県にはカエデの仲間が二十種類ぐらゐ分布する。それらのなかには丹沢でしか見ることができないものがある。ここに紹介するイトマキイタヤも、箱根に記録はあるが近年確認された報告はなく、丹沢上部では比較的普通に観察される種類の一つである。

そのギザギザの無いものは、いかにも蛙手の語源にふさわしい葉形をしており、イタヤカエデと総称される。そのイタヤカエデ群を葉の裏の毛の様子の違いなどによって何種類かに分けることができる。イトマキイタヤは、葉の裏の基部に褐色の毛が密に生えるという特徴があり、そのために、モトゲイタヤの別名もある。カエデの仲間では葉の裏面の基部が褐色に見えるのは本種だけである。

カエデの樹の下で、枝を見上げ、葉の裏を注意して見よう。葉の基部が褐色だったら、その樹はイトマキイタヤである。大木が多いので、下から見上げるだけではよくわからないことが多い。そんなときは地面を探索と必ず落葉が見つかり、葉の基部の毛を確かめることができるものである。全国的には関東中部の山岳地帯に産する。五月、黄緑色の花を咲かせるがめだたない。秋には黄葉する。

(続)

古文書講座 14

名主連の職人賃金引下願書

内田 清

近世の職人

職人の概念も時代と共に変わる。古代中世で広く手工業分野の職長を意味した大工は、近世になると木造建築技術者だけを指し、代表的な職種となった。近世の職人は、親方を主とした仲間を作り、城下町に集住して領主の保護を受けた。土農工商の工の身分に当る。しかし木挽(柱・板を製材する)や綿打(繰り綿を柔らかにする)など村で活動する職人は、農の身分であり、町に住む各種の棟梁・頭に統制されていた。

今回は、小田原領の木挽棟梁であった栄町の石井家(利隆氏所蔵)の古文書(『小田原市史』資料編近世3:一九五号)の一部を紹介して職人の賃金を考えてみたい。

職人の賃金と引下げ願書

写真版は、願書本文(写)前半で定形的な分りやすい部分である。要旨は①先年取決め値段を勝手に値上げしているので村むらは困っている。②先年の値段で処理しよう職人と村むらへ指示してほしい。とな

る。写真判で省略した部分に書かれている、職種や賃金を要約すると

①先年は天保十四年で六年前に当たる。②大工・木挽・桶屋は五分(四分

の一画)で八日が六日に、③萱葺・蔦職は九日が七日に、④黒鋸(石垣・川普請職)は六日が五日に、⑤綿打は百匁二十六文が三十六文にと値上がりしている。となる。

これは、賃金値上がりの顕著な職種が例示されたと見られる。値上がり率は、最高の⑤綿打は三八%、最低の④黒鋸でも二〇%である。値上りに反映している訳であり、⑤綿打の高需要などからは庶民の生活水準向上を推測できる。

また、この願書からは職人の賃金順位が④②③で蔦職が低かった事も分かる。職人達も度々値上げを申請しているし、親方・徒弟制の職人社会だから、職人個々の手取り賃金の把握は難しい。従って、願書が採用されても、御触書で一気に賃金がさがる訳でもないことが分かっている願書であろう。

差出人と受取人に注意

差出人は、初めの五人だけであると省略したが、連名の十七人は単なる有力名主ではない。願書には組合

石井家蔵書

一、職人賃金引下願書  
先年取決め値段を勝手に値上げしているの  
で村むらは困っている。先年の値段で処理  
しよう職人と村むらへ指示してほしい。とな  
る。職名は、大工・木挽・桶屋、黒鋸、萱葺、  
蔦職、綿打、石垣、川普請、石垣職、

願書本文

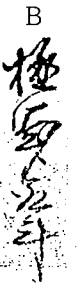
梅澤 大工  
井筒 木挽  
石井 黒鋸  
石井 萱葺  
石井 蔦職  
石井 綿打  
石井 石垣  
石井 川普請

注意してほしい語句

A せんねんおさたらもって

取締役の肩書きが付いていないようだが、他の資料と照合すると、相州小田原領の各組合村の代表である組合取締役である。従ってこの願書は相州小田原領全部の村の要求と解釈される。また省略してある願書の受取人も多い。鵜沢丈助を初めとして九人も連記し、いずれも代官・地方取締役などである点が注目される。

本史料での先年は一八四二年だが、前年の幕府の物価引下げ令に沿った「小田原藩の布達で」の意。年とは筆順を体得して置かないと迷う。



きめおきそうろうとりはからい  
 決めてあるように取り扱い。極は  
 決、斗は計の慣用。候はこの史料中  
 の各種の形と対比してほしい。

くだしおかれそうらハッ  
 被下置一も候ハッも慣用句なので  
 画が大きく崩されている。

# 川邊本家物語り (4)

かわべ たかし  
 川邊 昂

## 六 成功した

### 漁業家川邊家

明治二十二年(一八九)小田原海岸に伊藤博文の別荘滄浪閣が建築され国府津駅からの名士の往来も多かった。また、明治三十三年には皇室の御用邸が建設され皇女常宮・周宮がよく滞在された。第一回帝国議会は明治二十三年十一月二十五日初めて開かれた。この帝国議会上に於いて明治二十六年貴族院議員村田保が漁業法案を提出したが、この法案は幾多の変遷を経て八年後の明治三十四年全文三十九条の漁業法が可決された。この漁業法を「旧漁業法」と称しているが、日本で最初の統一の漁業法である。

この法では公有水面の漁業を①定置漁業権②区画漁業権③専用漁業権の三権に整理されており、更に一定の地域内に居住する漁業者は漁業組合をつくり漁業組合が漁業権をうけて組合員に行使させる規定が設けられている。

この漁業法が施行されると聞くや、川邊正之助家信は、国府津村・酒匂村の有志に呼びかけて漁業組合を作ることとし、明治三十五年(一九〇二)五月十日「七福漁業組合」が結成された。この組合員には、川邊正之助家信を始め義兄の小塩八郎衛門・叔父の西山徳次郎・叔父の添田伝次郎・石黒常吉・常盤市五郎・小峯

徳次郎・秋沢嘉蔵・平井正之助が名をつらねており、その目的は定置漁業権の取得にあった。しかし、酒匂村の地曳網漁業者は、地曳漁業の権利を守るため別に漁業組合をつくり、川邊家の企画する定置網漁業の設置に反対するむきもあり、正之助家信はこの漁業権の取得にも苦勞があった。

折も折、明治三十五年小田原海岸一帯に津波被害が起った。九月四日の津波、そして九月二十八日の大津波である。二十八日の津波は午前十一時頃、数メートルに及ぶ高浪は防波堤を越え、人家を潰し船を流し、道路田畑を破壊した。

小田原町の記録によると、死者十二人・負傷百八十四人・家屋全壊百四十四戸・半壊六百九十九戸・流出二百九十三戸・浸水家屋千戸に及んでおり堤防建設は小田原町の急務であると誌されている。この津波で酒匂村の地曳漁業は全滅し、正之助家信の漁船・魚捌具、松涛園施設も被害をうけ再出発をせまられた。

そこで川邊正之助家信は定置漁業に着業する決意を益々固め、漁業権取得に努力した結果、明治三十六年(一九〇三)四月二十八日、七福漁業組合の名義で小八幡地先に、免許第五十三番号

嘉永二己酉年六月

諸職人賃銀之儀、先年御沙汰ヲ以、直段取極置申候処、近年勝手ヲ以、追々直上ケ仕、於二村々に一茂難渋罷在候。依之乍レ恐奉二願上候ハ、先年極置候取計、直上ケ不レ仕候様、諸職人并村々江、茂御沙汰被二成下置一候様奉二願上候。右奉二願上候通被二仰付一被二下置一候ハ、難レ有仕合奉レ存候。以上

乍レ恐以二書付一奉二願上候御事

諸職人賃銀之儀、先年御沙汰ヲ以、直段取極置申候処、近年勝手ヲ以、追々直上ケ仕、於二村々に一茂難渋罷在候。依之乍レ恐奉二願上候ハ、先年極置候取計、直上ケ不レ仕候様、諸職人并村々江、茂御沙汰被二成下置一候様奉二願上候。右奉二願上候通被二仰付一被二下置一候ハ、難レ有仕合奉レ存候。以上

嘉永二己酉年六月

板橋村 丈右衛門(三井)  
 福浦村 浦右衛門(露木)  
 井細田村 彦右衛門(中戸川)  
 穴部村 与右衛門(木村)  
 蓮正寺村 善三郎(小沢)  
 (以下略)

雑魚小台網の免許を取得した。

この小台網とは小型根拵網のことである。

そこで、先づ資金を整えて海底測量・事務所倉庫の建設・漁具漁網の購入・従事者の選考、等の業務を始めた。研究はしていたものの初めての仕事で種々の課題があった。

そして、酒匂村小八幡浜の台四五九に事務所を構えて、明治三十六年十月二十五日見事に小台網の張り立てを完遂した。時に、正之助家信三十六歳・妻さき三十五歳・母菊六十五歳であり、長男家祥は十五歳で家業の手伝いを始めていた。これが、小八幡漁業の創設である。

明治三十七年二月日露戦争が始まり、翌明治三十八年一月旅順口陥落、三月奉天会戦、五月日本海海戦で勝利をおさめ、国内は戦勝の喜びに満ちていた。

しかし、家信が張り立てた小台網は、夏期・冬期に分けて三年程続けたが漁業成績が挙げがらず、七福漁業組合は実質的に解散してしまった。そこで家信は、冬期のみ規模の拡大を企て、

明治三十八年(六五)家信単独で免許第二百七十一号根拵網漁業の免許を取得し、

明治三十八年十二月冬期根拵網を張立てた。ところがこれも成績芳しからず経営は困難であった。

明治三十七年に非常特別税法施行、続いて相続税法も公布された。そして、明治三十九年には南満州鉄道(株)が設立された。

川邊正之助家信は、踏みこんだ漁業の道を何とか成功させるため日夜研究工夫を重ねたが、漁獲増大をもたらずには更に規模を大きくする必要にせまられていた。

その頃、真鶴の青木寿郎も同じように考えており、紀州九木浦に泊り込んで富山県灘浦から伝えられたと

云う越中式片起網を研究し、更に上野八郎左衛門が改良した上野式大敷網を真鶴に持ち帰り、明治四十二年(六六)真鶴沖網に大敷網

を張り立ててこれが大成功をおさめた。これを聞いた正之助家信は、早速この大敷網の研究を進め、鰺大敷網の張立計画にかかった。

明治四十三年(元〇)十年を経た旧漁業法の全面改

正が行なわれた。これを機に正之助家信は、鰺大敷網の免許を得ようとしたが、この網は規模が大きく酒匂・小八幡両部落の中間に位置することとなり、酒匂部落の須藤家の所有する三百四十五号地曳網場にまたがる

ので川邊・須藤両家で協定を結び、川邊正之助家信の名で免許を申請することになった。

これに対し百二十六人の組合員をもつ酒匂村漁業組合は大反対をしたが、遂に正之助家信は免許第三百四十九号をもって鰺大敷網の免許を取得し、張立準備にかかった。なお、夏網については小台網免許により根拵網で業務が続けられていた。

この鰺大敷網の準備では、家信自身が設計し、従事者には日夜この漁法を講じて作業が進められており、種々の問題を克服して明治四十三年十二月遂に鰺大敷網を小八幡地先に張り立てた。

これが川邊家の大型定置網経営の最初である。時に、家信四十三歳・妻さき四十二歳・母菊七十二歳・長男家祥二十一歳であり、弟の

辰二十九歳・政之助十八歳・

盛之助十五歳・武之助十三歳であった。

さて、この鰺大敷網の経営であるが、どうやら収支つぐなう経営であったとは云うものの、家信が努力を傾けて期待した程には漁獲があがらなかった。

そこで家信は更に奮起して、かねてから研究を進めていた更に大規模な定置網であり、宮城・富山・高知各県で鰺漁業の革命的な漁法として採用を始めた「鰺大謀網」を相模湾で初めて張り立てる決意をし、大金を投じてその準備を進め、大正元年(一二)鰺大謀網の免許を申請、免許第四百五十六号をもってこの免許を取得し、遂に大正元年十二月、家信の全智を傾けた鰺大謀網が張立てられた。

家信四十五歳であり、苦勞の多かった漁業家の途の最終の勝算であった。

この鰺大謀網は、大成功をおさめ、年々莫大な鰺の大漁が続いた。明治三十六年着業以来十年にしてその成功をみたのである。特に、大正三・五年の鰺漁は、空前のものであり、一漁期(半年)間の鰺水揚げは二十〇三千万尾に及び鱈や鯖も

大漁をみたのである。

川邊正之助家信は、この大漁の際にも定置漁業保全に努力し、前面の地曳網漁業権並びに七目網・ぶら建網の漁業権すべてを買収して小八幡漁業の保護区域とした。また、大正三年(一五

一五)漁業事務所を新築した。この事務所は、総ガラス張りの珍らしい建物であり、家信は、昼も夜もこの事務所の二階で漁業指揮に当たった。従事者は家信の指示が公明であり理にかなっていることから喜んでその指揮に従ったと云う。

更に、家信は、網具に対する工夫を更に進め、大謀網の中の「川邊式網型」と称される程となり、全国漁場の模範となると同時に大漁によって家信は「鰺王」と称された。

数年にして巨万の富をなした川邊正之助家信には豪快な逸話も多い。

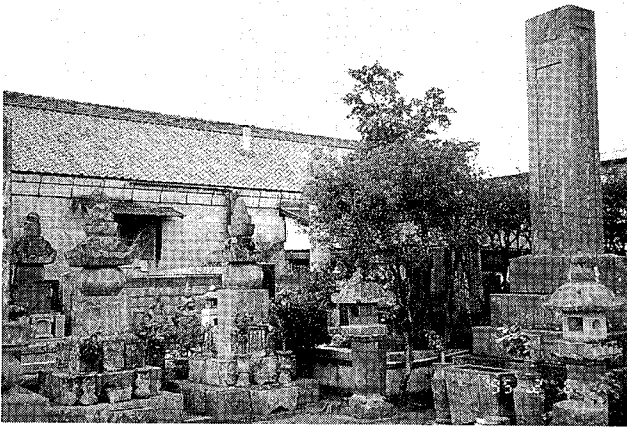
大正四年には箱根・二子山全山の植林権を買収し将来に備えたが、世に二子山を川邊家の築山に据えたと云われた。大正五年、時の鉄道大臣後藤新平の力添えにより一列車を貸切り、小田原酒匂の政財界人や取引先

を招待し芸者や酒肴も積み込んで従業員伊勢参りをした逸話は永く人の口に語りつがれた。

また、大正四年六月尋常高等酒匂小学校の校舍増築に多額の寄附をなし、理科の教材や備品を寄附し、更に、大正七年二月には同小学校の運動場として耕地約千坪を貸与した。これは後日酒匂小学校が体操日本一となる基礎を作った。この耕地は大正十二年に同校に寄贈された。

大正五年、後年活躍する

川邊家墓所 酒匂・大見寺



浜田万四郎氏(二十三歳)が勤め始めた。大正六年(一九一七)夏網漁業は明治三十六年以来小台網免許による根拵網であったのを「あじさば大謀網」漁業権として取得した。

かくて、明治から大正の急変する日本に於て定置漁業界に偉大な足跡を残した川邊家十代目正之助家信は、大正九年(一九二〇)三月五日五十三歳の華麗な生涯を終った。そしてこれは大正二年

鮒大謀網で成功を手にしてから僅かに八年目であった。時に、妻さき五十二歳・長男家祥三十二歳・次男辰三三十歳・四男盛之助二十五歳・五男武之助二十二歳で、家祥の長男家敏三歳であった。その葬儀も近郷近在からの参列者で盛大をきわめたと伝えられている。

あとがき

「川邊本家物語」は一応これで筆をおくことにする。この後は夫々の分家の物語に続くことになるであろう。この物語は確かな史実に推察を加えて取りまとめたもので、後日誤りを見出した時は積極的に修正していきたい。そして川邊家の人々が子孫に語りつくす素材に使ってほしいと思う。

温故知新と云う言葉がある。この物語に登場する我が祖先の生き方に眼をむけて考えてほしい。行間にかくれた人間の苦悩を推察すること、二度繰り返すことの出来ない人の生き方を勉強し、物語を聞く人の人生に少しでも役立つことを願って書いたものである。

九代目段右衛門家明は己の死にのぞみ長男正之助に対し「汝必ず我が意をつぎ、祖先の盛徳陰徳を深くかえりみて常に身を節し確門にへつらわす世間の交誼を失うことのないように」と諭した言葉は、川邊家の生き方を物語っている。

十代目正之助家信の漁業家としての成功も、祖先の

努力の積み重ねの上に更に一段と努力したことよったもので、その成功失敗は紙一重であったことを知るだろう。家信が中途で漁業をあきらめ消極的になったとしても川邊家の安泰はゆるがなかったであろう。が、酒匂住民のため漁業をめざし一途につき進んだことから今日の川邊家の漁業家の姿が生まれたのである。

歴史は唯知るのでは意味がない。歴史の中に生きた人々の人生を考え、思いめぐらし、そして私等自身が反省し、また勇気が与えられて己の進む途を探し出すことに意味がある。また、人生には運と云うものに左右されることも多い。然し、成功や失敗の結果で人間の生きる値打ちが決まるものでもなからう。ひたすら、誠実にそして懸命に生きていくことが人間に大切であることを、我等の祖先の歴史から学びとらうではないか。(丁)

筆者の略歴

- 一九四(大正三) 酒匂村にて出生
- 一五二(昭和六) 県立小田原中学校卒業

- 一九四(〃) 一六 浜松工業専門学校卒業
- 一九六(〃) 一八 酒匂小学校PTA会長就任
- 一九五(〃) 一七 株式会社小八幡漁業社長 就任
- 一九三(〃) 一五 小田原ロータリークラブ 会長就任
- 一九五(〃) 一七 東海大学病院にて逝去

編集付記 「川邊本家物語」は、今回で終了となりますが、この物語には、川邊本家系図、酒匂大見寺にある川邊家墓石の銘集録(坂本紅蓮洞実兄村岡尚功選文)などが付してあり、併せて、川邊家の財産目録の写しの提供を受けました。が、紙面の都合で割愛いたしました。

なお、以上の資料の提供を受けるに当たっては、小八幡の和田次郎氏のお骨折りがありませんでしたこと、厚くお礼申し上げます。また、吉池清氏が連絡の労をとられましたこと感謝いたします。(陶生)



# 孝行者藤右衛門尚清 (4)

## 石綿 勉

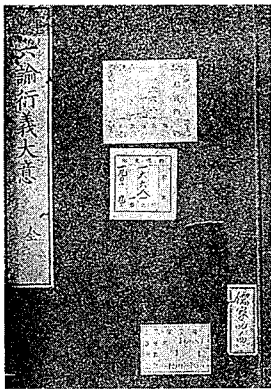
### 五 『六論衍義大意』からみた 孝行と成りゆき

六論衍義大意は、前にふれたように、幕府が発行した徳目中心の道德教科書である。

六論とは、父母に孝行・長上を尊敬・近隣と和睦・子孫を教育・身分を尊重・非道をせぬなどを論じた徳目六項をいう。中国の清の世祖が天下を平定したとき、この六論を定め、解説をつけて『六論衍義』とし、国民教化に使ったという。

これが八代將軍吉宗の眼にふれ、庶民用の道德教科書に仕立てようと思いたち、室鳩巢に命じて和訳・解説したのが『六論衍義大意』であるという。享保七年(一七三三)の刊行。藤右衛門の二十歳の時であった。

『孝義録』掲載の藤右衛門の孝行 『六論衍義大意』(享保七年刊)表紙



ぶりを、六論衍義大意(以下、六論と略す)を通してみると、この思想を具現している傾向をみせて興味深い。

その1 藤右衛門は、六論の一項「父母に孝行」の要点を表出している。

①六論のいう「父母に飽暖なるよう」、次のように配慮している。

○母が年老いて歯がなくなれば、食事は軟らかなるものを調理させてさしあげた。○小田原に出る用事があれば、菓子など求めて帰った。○母に好みのお茶を入れてあげた。○魚の類は食べない心配など。

飽暖は「飽食暖衣」の略であるが、「衣食」と解して考えたい。母の好物の他に、調理や栄養のバランス等にも気くばりをみせて、健康食で楽しい飲食に心がけている。楽しい飲食は、幸せ・満足を感ぜさせるものである。

衣を「寒暑」まで拡大解釈すれば、「涼しい所に母を連れ出し」て、いたわっている。ここちよい空間へいざなって、濃やかな思いをみせている。②六論のいう「父母年たけて後は、大かた側をはなれず」の孝行を、次のように具現している。

○母が毎朝おそく起きて囲炉裏に座ると、側に行ってお茶を入れ、談話した。○夫婦で蚊を追い払ってあ

げた。○母が寝つき悪い時は、寝入るまで物語りした。○母の病ある時は、添寝して明かした。○母が風呂に入る時は、自ら湯のぐあいをみたり、垢すりなどして、人の手をかりることがなかった。○母は藤右衛門の膝の上で息絶えた程だった。

今の世からみれば、異常と思える孝行ぶりである。母の体が気になると、すぐさま側に行つて面倒をみている。しかも積極的な対応で、信念を感じさせる母への熱き思いである。

③六論の「父母の心中、いかほどの安堵、いかほどのよろこびとかしる」ことを思いやり、次のように対応している。

○母はかねて剃髪したいと言っていたが、気血も薄く衰えてしまうことを心配して思いとどまるよう諭した。遂に剃髪を聞き入れて信仰の生活に協力した。○藤右衛門は若い時から酒を好んでいたが、母の心を悩ませることを憂え、五十一歳の時より酒を断っている。

このように母の心を安んずることに心がけ、これにそって自律もしてまごころを尽くしている。

六論は「第一に意得べき事は、いかほど父母の身を孝養すとも、其心を安せずしては、大なる不幸といふべし。」と説いて、親の心を安堵させることが一番大事であるとしている。

その2 藤右衛門は、六論の二項「長上を尊敬」を村びとに教

えている。

六論では「長上というは、我より年たけ、又は位たかく、わが上にある人をいうなり」とし、「高位なる人、賢徳ある人、老年なる人、これを三つの達尊とて、天下におしわたつて敬うべき人とするなり」と論じている。

「又他人にていはばその年輪わが父と同輩なる人をば、父に準じて敬ふべし」とも教えている。

藤右衛門は、百姓代という役を務めた時、村びとが集まると、たとい人の親だということも、老いたる者を敬うべき旨を常に諭したという。

これは、百姓代の役目柄の故か、自発的行為か、定かでないが、いずれにしても六論の二項の内容を表出している。

その3 藤右衛門は、六論の五項にある「職分のつとめ」を、ひたすら果たしている。

孝義録は、①母が常に言う「日の出の先に起きて、よろずの仕事なすべし」ことを道理と思つて、若い時より家にいても旅にいても、夜明け前に起きている。早起き励行による家業精励の姿を表出している。六論のいう「我に當りたる職分をつとめば、おのずから家に當りたる衣食ありて、一生安穩にくらすべし」を母に代弁させている風情である。

②「紺屋の職をしているが、半分は日の恵み深しと思つている」藤右衛門だった。太陽の光を有効に利用

している紺屋職を、ありがたく思っている。六論が諭す生涯不変の「生理」(生活する道)すなわち紺屋職の身分をわきまえて、家業に励む姿を伝えている。

以上のように、孝義録の中の藤右衛門は、六論の思想と重なる面をみせ、表出している。これは六論の思想が、藤右衛門の生活にまで民間に広く浸透したことを物語っている。為政者側の描く「期待する人間像」の人づくり政策の成果をみせている。

六論発行(享保七年)から六十七年後の、孝義録編集(寛政元年)である。編集する際、昌平坂学問所へ領主の代理人を呼び出し、事情聴取をして、孝義録の伝文を作ったという。

この時、藤右衛門は生存中(88歳)だったので、小田原藩主の代理人は、予め本人からも行状を聞いて、昌平坂学問所に行ったと思われる。従って孝義録の藤右衛門の行状は、事実を伝えていると思う。

さて六論の思想の浸透であるが、藤右衛門とその周辺に浸透してゆく経過と背景をさぐってみよう。

### ①五人組帳前書の影響

小田原藩が享保十七年(一七三二)に布告した、五人組帳前書がある(藤右衛門30歳時)。五人組帳の本文の前に、村民の心得を箇条書きに長々と書かれたものを、五人組帳前書という。

この箇条書きの五項目に、「父母に孝行、家族や親類と融和」の記事があった。次はその内容である。

「一、父母に孝行、夫婦・兄弟・親類とむつまじく可仕候、若諸親類と不和にて異見をも不用、不幸不義之輩有之ハ、名主・組頭・五人組致吟味可申出事」

六論の第一徳目「父母に孝行」と、第二徳目「長上を尊敬」第三徳目「郷里を和睦」との重なりをみせている。

内容の「夫婦・兄弟・親類とむつまじく……」は、六論の第二と第三の徳目のおもむきを融合させたように感じる。

すなわち、「第二の長上を尊敬」の中に「或は妻子の語にまよひ、或いは貨財の欲にひかれて、ややもすれば不和になり、はては兄弟親族たがひにあらそひにもおよべば、天性骨肉のしたしきも、忽ちして仇敵のごとし。いとあさましき事なり」とあって、身内同士の争いを戒めている。

第三の「郷里を和睦」では「先我一家のむつまじきを本とすべし」と記して、一家の融和を説いている。また「凡郷村にある人は、先是等の不義を相互に吟味すべし」とも記して、村人の不義を警告している。

いずれも六論の主張との共通性をみせていて、前述の融合を感じたのである。これはすなわち、六論の思想を部分的に五人組帳前書に採りいれていることを意味しているように

思えたのである。

この前書は、「毎年正月・五月・九月一カ年三度」寄りあいをもって、村びとに読み聞かせ、この趣を常々守る事を記して、周知徹底をはかっている。つまり、前書を一種の公民教科書として学習し、聞いたことを常々実践するよう奨励している。いわば成人教育による、為政者側の思(社会秩序の安定・維持発展等)への教化策に思える。

藤右衛門は、30歳時に父(七代尚康)を亡くしている。従って前書を聞く寄りあいに、戸主として出席は当然であるので、この前書の影響も考えられる。

### ②幕藩関係の面

小田原藩は、藩主が幕閣に参与していた幕藩関係にある。藤右衛門生存中では、彼の少年時代に藩主だった、大久保忠増の老中就任が最たるものであろう。

藤右衛門の生涯91年余の中で、藩主は五人に及んでいる。忠増・忠方・忠興・忠由・忠頭である。

それぞれ、次のような職名で幕府に出向していた。

○忠増。老中、勝手掛老中、若年寄、寺社奉行、奏者番。

○忠方。本丸大手門番役、増上寺警衛。

○忠興。桜田方火消役、本丸大手門番。

○忠由。桜田方火消役、本丸大手門番、増上寺警衛。

○忠頭。桜田方火消役・本丸大手門番、増上寺警衛。

これは藩主になる前を含んでいるが、代々幕府とかかわりをもっていった。従って小田原藩政は、幕政に準じて運営されていた一面を予想する。

將軍吉宗の願いの六論が発行されたのは、忠方が藩主の時である。この後の小田原藩では、幕府の教化政策に呼応して、領内の教化策を推進してきたことが考えられる。前述の「中里村五人組帳前書」の内容が、これを裏づけている。

### ③寺子屋教育の影響

六論の成りゆきから、民間への浸透をみてみよう。

○將軍吉宗は、六論ができあがると、ただちに府内の熱心な寺子屋師匠を賞し、六論を与えた。

○翌月には、市中一般の師匠にも六論を贈与した。

○さらに全国の寺子屋にこれを習字手本にせよと命じた。

○褒賞による六論贈与は、代々の將軍にうけつがれて、固定した政策のひとつとなった。

○地方の大名は、幕府のこの政策を見ならうものが少なくなかった。

吉宗は、六論を寺子屋の道徳教育の基本的教材と位置づけ、徳育の徹底をはかる政策を施行したという。寺子屋を教化に利用した吉宗であった。

寺子屋には、より多くの人に、しかも若者に、永続的に教え導いてい

ける魅力があった。

藤右衛門が藩主から表彰された安永元年(一七五二)当時の小田原府内には、私塾「孤嶺館」があった。

孤嶺館は、宇野元隆が小田原藩の儒官(藩士に儒学を教える教師)を勤めるかたわらに開いた私塾で、藩士の子弟を教育した。元隆は、元禄期から死去する元文二年(一七五三)まで勤めたという(元文二年は、藤右衛門の三十五歳時にあたる)。

元隆後の宇野家では、雷沢・西海・懐徳・之堅と五代にわたって、儒官と孤嶺館を継承し、人材の養成に尽瘁した。

六論の成りゆきから、この孤嶺館にも六論の贈与・活用を推察する。

藤右衛門の学ぶ環境を、なりわいからみてみよう。

藤右衛門の京紺屋は、藩から紺屋頭を代々認められていた。京紺屋の当主は、藩内の紺屋を配下に、藩の染物関係の需要に対応してゆく立場にあった。

例えば三代正輝の頃、藩よりの「中間衆の羽織式百人分を早々に染める」仕事があった。この時、早急もあって配下の紺屋も協力して仕あげている。このように藩とつながりをもつ京紺屋であった。

この八代目当主として藤右衛門が活躍するのは、七代尚康が亡くなった享保十八年(一七三三)以降であろう。

藤右衛門は三十一歳であった。彼は孤嶺館に入門したかどうか定

かでない。孤嶺館は藩士の子弟を教育する目的で、自宅に設けた私塾と度度の教育をほどこしたことが知られている。

当時の、身分差のきびしい社会の中で、庶民の藤右衛門の入門は難しいと考えたくなる。けれど幕末の宇野塾には、女子も入門し、庶民の子弟の入門も増加したという。すると、当時も少しは庶民の子弟の入門も許されていたのかもしれない。まして、藩の染物御用達の子息であるので、入門が許されたことも推察できる。

藤右衛門には、京紺屋後継者として必要な基礎知識の習得があった。藩や同業者・顧客などとの書簡の往復、契約者の交換、注文帳・売上帳などの帳簿記入、金銭出納など営業活動に必要な、読み書き算術の学力や社会の成りたち、礼儀作法などの習得である。

これには、当時でも「幼稚の時より手跡、算術執り行うこと肝要」と、少年時代の学習が重視されていた。また、どこかの寺子屋入門も考えられる。一般的に寺子屋は、読み書き算術の他に、人間のあり方も教えたという。

孤嶺館、寺子屋、いずれにしても、儒教の思想による教育を受けたと思われる。その中で、為政者側の望む人間を育てる(六論などの徳目を身につける)教化の授業を想像する。こうした教育環境から受けた、藤右衛

門の徳性の陶冶も考えられる。

#### ④寺院からの影響

藤右衛門は、母の剃髪や、題目唱え等から、蓮生寺と接触している。この蓮生寺は菩提寺で、今の御塔生福寺(日蓮宗)である。

こうした住職とふれあう中で、法華経から孝道を知らされていたのかもしれない。例えば、次のような教えである。

・日蓮のいう「知恩報恩」恩を知り、恩に報いることが人間であり、仏教の教えであること。四恩(父母の生み育ててくれた恩、国土・国家・社会の恩、いろいろな人々に直接間接に助けられている恩、この世を救っている仏・法・僧などの恩を知り、報いることが、人のふみ行なうべき道であると教えている。

・日蓮は両親への孝養について、ことのほか心にかけていた。そして、真実の報恩は法華経の成仏にあるとして、みずからの法華経修業が、ただちに父母への孝養でもあると教えている。

この「みずからの法華経修業」が、藤右衛門にもみられて、説教の実践を思わせている。

孝義録のいう「母が亡くなった後は、毎朝寅の刻に起きて、先祖厚恩菩提のためと高らかに唱え、法華経の題目を念じた。……夜があげれば、日那寺の蓮生寺に行つて、家で唱える声よりもひときわ高らかに、題目を唱える事を常とした。」という姿

が、それである。

また「知恩報恩」の教えは、六論の思想とも重なりをみせて、為政者側に都合のよい説教となっている。

以上藤右衛門の孝行と成りゆきを見てきたが、六論等との重なりを随所にみせて意味ある趣である。

これは、六論等の徳目の教えに対応し実践した藤右衛門を意味しているように思える。つまり、幕府の教えを忠実に守り、実現してくれた人物を示していた。

すると孝義録は、為政者が庶民に期待した徳目(六論や五人組帳前書)を忠実に実践した模範者の記録集ということになる。模範者を世に示して、庶民を為政者の期待する人間像に誘っている妙がある。

孝義録の「老中松平定信の建議に基づき、寛政改革の一環として、国民教化の資料とするために編纂された」という意図が「なるほど」と了解できた。

右衛門の行状は、当時が為政者が願った「期待する人間像」に近づける模範例として、人材養成の資料に広く利用されたのである。(続)





小田原市章は、梅の花形。

「正月ばかりにむめのはなに」の詞書きから始まる、梅の花の、歌詠者源重之は、平安中期、貞元元年(九二〇)に、相模の国司として赴任した、国司歌人として、又「三十六歌仙」、「百人一首」歌人として、著名な歴史上の人物であります。

彼は早くから歌人としての才を発揮し、帯刀先生であつた若きころ、東宮に奉つた百首歌は、百首歌形式の歌詠のはじまりとして、和歌史上、重視されています(『神奈川県史』「通史編I 原始・古代・中世」三六頁)。

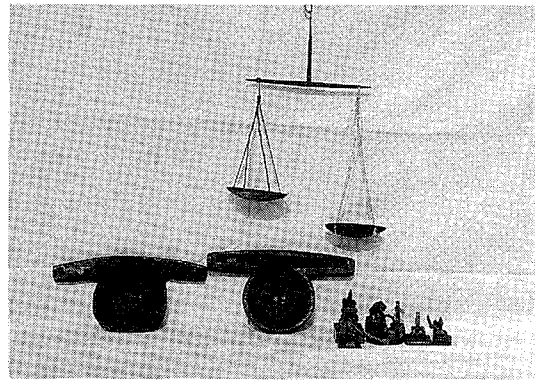
このように我が国の、和歌史上、創始者としての分野を認められている重之には、相模に存在して詠じた、歌枕「こゆるぎ」の題材と共に、歌集の中には、梅の花を題材とした、いくつもの詠進があります。

その中の一首を、目加田さくを先生(梅光女学院大学客員教授・福岡女子大学名誉教授 著『源重之全釈』(風間書房昭和六十三年九月発行)から引用させていただきます。

正月ばかりにむめのはなにゆきのふりかゝりたるをよのうき事をおもふころにて

はなのうへに  
ちりくるゆきの我ならば  
いかにうれしき  
いのちならまし

### 一千年前に旧縁を求めて 歌人 源 重 之 (2) 日下部 庄一



伝 源重之携帯砂金量り

香ぐわしい白梅の上にフワリと降りつもる雪、ああ羨しいなあ。清浄で。汚れた人間共の世界でなくて。

目加田先生の文章を拝見して、私は、こう思いました。歌の中で、雪にみたてた。

「通釈」正月時分、梅の花に雪が降りかかっているのを見て、折しも、世間の辛さをかみしめるころだったので

梅の花びらの上に散りかかる雪、あれがもし、私の身の上だったら、どんなに嬉しい生命であろうか。人間なんか真平だ。凜と咲く

重之公の心は、やがて花の中にとけ込んでしまう自分自身を、「いかにうれしき生命ならまし」と歌うとは、なんと美しい、梅の花を尊ぶ心なのでしょう。相模国には、遥かに古代から梅を、よい香りの初春の花として愛でていたのかなあと思いたくなります。

梅は、奈良時代、初め葉用に中国からとりよせたものというのが通説のようですが、十世紀頃までは、花といえば梅の花を指す時代が続き、梅は貴族の庭に植えられて、愛好されていきます(『世界大百科事典』)。

また、古代、梅が相模の地に齎(あづか)られた事は、『神奈川県史』「資料編」考古資料」によって明らかにされています。

食料 … (前略) … 植物性食料として農作物(ヒエ・アワ・豆など)や、山野での自然物採集品(クルミ・トチ・クリ・シイ・カシ・クヌギ・ナラ・カヤ)が当然あるが、わずかに種子の発見された例は、小田原市下曾我精神病院内遺跡があり、ウメ・モモ・クルミのほかヒョウタンがある(前掲『真史』の解説)。

更に、この書の図版には、桃の種子と共に梅の種子五粒の写真が紹介されています。

このように、私達の郷土には、確実に古代、梅が植栽され愛好されていた訳で

す。

源重之相模権守から四十八年後乙侍従(歌人相模)は、夫と共に国入りして、歌集を残します。その中に梅を題にした歌があります。今年から、一千年前に

「歌枕見テマイレ」との勅命を奉じ、実方中将と源重之が、たずね歩いた長徳元年(九二〇)から歴史も進み、更に、五百年を経ると相模には、後北條時代がおとずれます。そして、小田原と呼ばれる地名が生まれました。

今では、五百年の伝統を持つ、小田原梅干し、と美しい花を咲かせる、多くの梅林が有名です。

又、本年は、五百年前に北条早雲が、箱根山を越えて、攻略して来た年(〇〇)であり、本年から数えて、一千年前と五百年前とを、同時に数える歴史上の基点として、私達小田原市民にとって、特別な、意味のある年回りでありますので、重之梅の花を題材として、「郷土の遥かなる過去に旧縁を求めて」述べて頂きました。

(続)

## 紅蓮洞・坂本易徳 ⑳

岡部 忠 夫

## 函東会報告誌

坂本易徳は、『函東会報告誌』第五号(明治二十三年二月発行)に、「報告誌編纂の方針に就て」と題して一文を載せている。

報告誌の生るるや、其評判一にして足らず。ほむるもありこなすも有り、能く筆紙の盡す能はざる程なりし。此等の評判にも拘らず、冷々然と四号迄発刊せし当局諸君の勇氣感服するに余りあり。偕其評判中「書生仕事にしては……」或は「斯んなものか。」杯の中でほめたるか? こなしたるか?、其れは兎も角何れにしても、其当を得たるは、「玉石混淆」と謂うことなりし、実に玉石混淆にて有りし。然らば以後は材料を選択して石を省て玉許りにせんか?

『函東会報告誌』は、函

東会の機関誌として、明治二十二年(一八九九)十月創刊され、現在、小田原図書館に所蔵されているのは、明治三十一年十月発行の第四十八号迄で、この後どのくらい続刊されているか判らないが、少くとも十年間は継続されたことになる。

この機関誌の母体となった函東会について触れると、足柄上下両郡出身の在京学生が、互いに親睦をはかり、知識を交換し、協力しあうことを目的として、明治十五年(一八八二)頃、創立されたもので、『函東会』の名称は、函嶺の東にあるということから名づけられた。発起人は、司法省法学校生徒の小川正治、東京師範学校生徒の村岡尚功、東京大学学生大谷津直麿らであった。

この三人は、いずれも旧小田原藩士の子弟である。小川正治は司法省法学校を卒業後、各地の判・検事を勤めたことは前号で記した。村岡尚功は、明治十七年

(一八八四)師範学校卒業、のち師範学校長、中学校長を歴任している。坂本易徳の実兄に当るが、両親が同じ兄弟であっても、その生涯の生き方に大きな違いがある。このことは、あとで記したい。

大谷津直麿は、明治十九年(一八八六)、帝国大学卒業。その後の消息については、坂本易徳が、「最初づくし」(『小田原の史実と伝説』第八輯大正十一年九月発行)に、次のように書いているので引用する。

学士が学位でなくて称号になってからの最初の学士は、理学士大谷津直麿氏である。氏は、植物学専攻の士で、理学部卒業後に学習院教授となったが、暫くして、これを辞して、豪商田中平八と共に海外視察に赴いたなどしたが、後には大阪高専商業学校に教鞭など取り遂に大阪で商業界の人となったと聞いて居たが此の程、身逝ってしまったという話だ。

大谷津直麿が職を転々としているのは、『函東会報

告誌』の会員消息の項を追うだけでも分かる。

学習院教授	明治19年
富山県富山尋常中学校	明治22年
田中銀行々員	同 23年
成立学会教頭	同 23年
徳島県尋常中学校長	明治25年
商業素修学校教授	明治26年

八年間に勤め口を六カ所も変えている。北村透谷の父玄快も、大谷津ほどではないが、明治維新後、同じ行政畑であっても小田原藩兵部省(海軍省)、大蔵省、足柄県、大蔵省、司法省など、人事管轄の異なる役所を転々としている。

明治十年代から二十年代にかけては、学校や役所の分野では、それに適合する知識や能力を持っていさえすれば、職を選択することが、現在より容易な時代であったのだろうか。

もっとも、大谷津直麿や北村玄快の二人だけの動向だけで判断するのは、ちょっと無理があるが、ともかく、官公庁といわず、学校といわず、社会全体の仕組みが、

まだ固定されず、流動性に富んでいたと感じられる。それにしても、大谷津には、最高学府を卒業したという気負いがあったのだろう。北村玄快にしても、自分の才腕に自負があったと思われる。二人とも、その志を満たす事が出来ずに勤め口を変えていったに違いない。

紅蓮洞・坂本易徳の場合、勤め口を転々とすると同時に職が変わっている時期がある。そして一つの職場に根をおろすこともなく、浮草のように、さすらいの生活をしている。勿論、自分の意志による職場の交換というものの、紅蓮洞が一つの職に留まっていられなかったのは、彼は、ある期間をすぎると行き詰りを感じ、そこから脱け出すようにして、新しい局面を求めたのではないかと思われるが、この事はあと廻しにして、先に『函東会報告誌』に関連した事に触れる。

前に記したように、函東会の発起人となった、小川正治は家録百五十石、村岡尚功は八十石、大谷津直麿は六十石の、それぞれ、中下級の旧小田原藩士の子弟

である。

それにしても、函東会の主流は、旧藩出身の子弟であった。勿論、農村の素封家の子弟も会員となっているが、その数は少ない。坂本易徳と同じ慶応義塾正科に在学し、下宿も同室であった下山恪三は、酒田村(現・足柄上郡開成町)の旧家の出身であった。このことは、当時、大学や専門学校などの高等教育を受けることが出来るのは限られた階層であったことを物語る。これは、何も旧小田原藩領に限られたことではなからう。

まず『函東会報告誌』第一号に掲載の発刊主旨を拾いあげよう。

夫レ相模ノ地ハ山ヲ負  
ヒ海ヲ擁シ氣候温暖地味  
肥沃殊ニ山海ノ産ニ富ミ  
頗ル生活ニ便ナル一楽境  
ナリ故ニ民族亦自ラ儉安  
〔一時の安らぎをむさぶる〕  
ノ憂ナキ能ハズ就中彼梅  
干塩辛ノ如キハ夙ニ「早  
くから」人口ニ膾炙「広  
く世人の話題となり賞賛さ  
れる」セリ而ルニ其人材  
ニ至テハ寥々「数が少い」  
トシテ之ヲ耳ニスル事ナ

シ嗟一郷同俗ニシテ豈ニ  
甘ジテ之ニ安ンズベケン  
ヤ然レバ人材ノ養成ハ正  
ニ今日ノ急務ナリ苟モ能  
ク此任ニ当ルベキ者少壯  
有無ニ非ズシテ誰ゾヤ今  
本誌ヲ発刊セントス蓋シ  
「考えてみると」亦竊ニ此  
ニ感発スル所アルナリ因  
テ先ツ後進ノ志氣ヲ揆揮  
シ大ニ奇傑ノ才俊ヲ出シ  
梅干塩辛ヲシテ独リ其聲  
名ヲ擅ニセシメザラント  
欲スルノミ

人材の乏しさに対し、梅干・塩辛の名声を引き合いに出すのも、口語体だとうもじっくりしない。人と物とを同じ視点に置いて論じられるのも、文語体のよさなのだろうか？

ともあれ、西相模の地は、氣候温暖で地味に肥え、山の幸、海の幸に富み、とても生活するに都合がよく、安らかで心地よい土地柄である。しかし、時代によっては、地域によっては、そのまま鶴呑みにする訳にはいかないかもしれぬが、ともかく、人情、風俗には、目先の安楽にどっぷりつかると傾向があるのを否めない。だから人材が育たない

という。

小田原での成功者は、小田原で生れ育ったのでなく、他国から移って来た人であると言われて来ている。

また、小田原の地に、大商人が育たず、実業家が生れなかったのは、小田原の町それ自体狭いし、それに背後地の酒匂川流域の平野が狭小で大消費地としての魅力に欠け、商人の活躍する舞台が狭かったからだと思われる。

しかし、現在では事情が変わって来ているようだ。もっとも明治二十年代以降の日本の資本主義の勃興期に活躍した渋澤栄一や益田孝と比較するのは、時代が違うので当を得ないが、現在それなりに企業を發展させて来ている人々がいる。創業者といわず、二代目、三代目の人が成功している。中には日本を離れて世界を舞台にしている人もいる。

その主な要因として、交通・通信手段に伴う情報化社会の到来による、市場拡大という社会的条件の変化を念頭に入れる必要があると思われる。

ところで、『函東会報告

誌』の発刊主旨は、まだ続く。

今我会員ニハ政治、法律、農、工、商、医、理化、数学等ノ諸科ヲ修ムル者アリ故ニ本誌ハ主トシテ其各科ノ論説、記事、演説及内外ノ通信ヲ記シ又別ニ質疑、詞園、雑録等ノ部門ヲ設ケ其他、荷モ學術上ニ関スル事項ハ力メテ之ヲ蒐録シ一ハ学生ノ識見ヲ弘廓シ(ひろめ)一ハ進取ノ氣象ヲ暢達シ(のばし)而シテ(そして)常ニ相協和スルノ実ヲ堅クスルニ於テ遺憾ナカラシメントスルナリ

この発刊趣意書によって

『函東会報告誌』が、「おおよそどんな雑誌であるか見当がつく」「内容はきわめて広範にわたり、今日でいえば総合雑誌ともいうべきものであった」「当時の地方雑誌として特異な性格を持っていくばかりでなく、明治中期の郷土研究にいくたの資料を提供する点で、きわめて貴重な文献となっている」「石井富之助氏『図書館一代』。事実、本稿でも度々利用させてもらって

いる。また、『小田原近代教育史』資料編第一巻にも引用されている部分がある。ただ地方雑誌といっても、印刷は、東京でなされている。当時、活字が充分に揃った印刷所はまだ小田原になかったものであろう。

ついでに記すと、大正に入ると、小田原で印刷されたものが目につくようになるが、活版刷りであった。色刷りが出てくるのは昭和六、七年頃で、井細田(扇町二丁目)の足柄印刷所主土屋秀男氏が、当時小田原に初めての多色刷印刷機を導入した。しかし、オフセット印刷ではなく、石版刷りの印刷機であった。

現在、各種印刷物や刊行書の発行が、小田原間に合うようになったのは、昭和三十年代のわが国の高度成長期以降のことで、その背景は、印刷技術や印刷機の発達に勿論の事、地域の需要に支えられての事である。

『函東会報告誌』が、函東会の発足より約七年ほど経って発行するようになったのは、会を再生して活発な運動を始めようとしたことにある。

(続)



95年11月13日

井細田大橋開通



井細田大橋開通を祝って 白山中学校プラスバンド

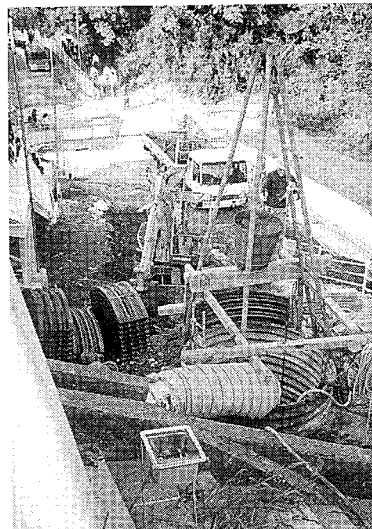
# 街

## いろいろ



上より お堀端駐車場・国際通り歩道橋・小田原駅前

栄町ダイヤ街にて



青橋・早川口道路トンネル工事



# 新刊紹介

## ◇小田原市史 別編 城郭

『小田原市史』は、全十六巻(資料編九巻、通史編三巻、別編三巻、ダイジェスト版一巻)の刊行予定で、一九八八年から始められたが、既に七巻(資料編 原始古代中世Ⅰ、中世Ⅱ・Ⅲ、近世Ⅱ・Ⅲ、近代Ⅰ・Ⅱ)が発行されている。

市内各地に残る陣場の位置を考証、第四章の「小田原・足柄地域の城館跡」では小田原市内・足柄上下両郡にあった城を縄張を中心にまとめる。いずれも写真や図版などを使って分かりやすく説明している。

資料編では、二十九点の城絵図についての考証と解説をして十六点の小田原城の古写真と、中世・近世・近代の史料一二二点を収録している。遠隔地で購入希望の方は、直接、〒250小田原市城山四一三二小田原市史編さん室(☎0556-2233)に申し込まれるとよい。B5五〇ページ、ハ、三〇〇円

## ◇小田原城

名城シリーズ⑧ 榎学習研究社刊 B5四三ページ定価 一、五〇〇円

この書は、小田原城郭研究会会員を初め、歴史や発掘にかかわる地元専門家や研究者十八名が分筆しているが、全体として調和のとれた内容となっている。

また、数多くの図と写真を取り、小田原城の歴史的移り変りの概要を分かりやすいものとしている。その主な内容は次の通り。

- 「復元」北条氏小田原城、石垣山一夜城 近世小田原城、二の丸銅門、住吉橋
- 「歴史」北条氏の本城小田原



規模巨大にして 構造巧緻を極めた築構の 未知の実態に迫る!

北条早雲の事蹟に関する諸問題 特集Ⅱ 戦後五〇年…民衆のあゆみ 「戦後五〇年」とは 金原左門 — 生活の場から断想 —

△研究報告 戦後小田原における民衆運動▽

木村敏男と「でこぼこ運動」30年 — 運動の持続性と自発性をめぐって — 土方直史 雨宮伊之助とその周辺 森田正 戦後小田原地方の労働運動について

— 五大争議を — 伊藤喜代治 中心に △私が生きた戦後五〇年▽

戦後の小田原と蜜柑(内田一正)、戦後五〇年、小田原周辺の漁業の盛衰(西山敏夫)、お城通りと私(山崎悦子)、木と向き合って五〇年(二宮義之)、戦後の女性に思う — 一目で (永井康枝)

# 雑誌紹介

## ◇おだわら — 歴史と文化

第九号 95・11 A5 三三頁 価 一、二〇〇円 発行所 小田原市史編さん室

発行 北条早雲の実像 特集

△鼎談▽北条早雲の足跡を追う 有光友學・永原慶二・岩崎宗純 北条早雲の小田原奪取の背景事情 (全国的な政治情勢との関わりあいから)

北条早雲と天宗寄 岩崎宗純 △研究ノート▽ 北条早雲の相模侵攻 森 幸夫

## 計報

飯倉乾一氏

(小田原市寿町三十一番一四) 昨年七月十九日逝去されました。享年八六歳

ご冥福をお祈りします。

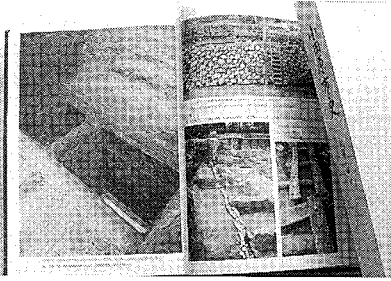
## 小田原史談会行事

埼玉方面 平成七年十一月 史跡めぐり 十九日(日)晴 小田原駅前七時出発十九時帰着

「コース」小田原・厚木道路小田原東IC⇨東名高速道⇨港北PA⇨首都高⇨外郭環状線⇨関越道⇨高坂SA⇨三芳PA⇨東松山IC⇨坂東十番正法寺(岩殿観音・東松山市)⇨埼玉県立歴史資料館・国指定史跡菅谷館跡(畠山重忠居館跡・嵐山町)⇨東松山IC⇨花園IC⇨昼食・ドライブイン関所⇨花園IC⇨東松山IC⇨坂東十一番安楽寺(吉見観音・吉見町)⇨国指定史跡吉見百穴(吉見町)⇨東松山IC……

「参加費用」七千円 「参加者」(順不同敬称略)

岡部忠夫、向山重忠、山口一夫、杉山竹二、岩本武、菊地八千代、百代、野口よし、相原俊夫、佐和子、三橋国雄・ふさ子、増田任司・頼子、河合浩太郎・美枝

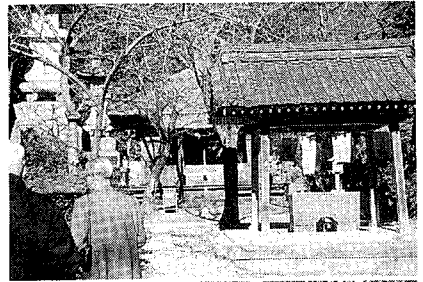


特別賛助会員

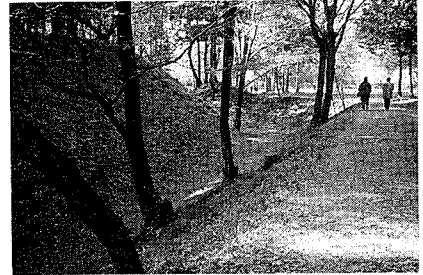
智恵袋 相田酒造店  
 小田原銀座 アオキ画廊  
 熱海 アオキクリニック  
 足柄香粧株式会社  
 飛鳥屋  
 紳士服の アメリカヤ  
 (株) アルファ  
 画材 ガクブチ ヲウエ  
 伊勢治書店  
 伊豆箱根トラベル 小田原営業所  
 かまぼこ  
 南足柄関本 おぎの整形外科・歯科  
 税理士 小澤重治事務所  
 公認会計士  
 株式会社 小田原魚市場  
 小田原ガス  
 小田原市農業協同組合  
 小田原報徳自動車  
 株式会社 オートセンター・スギヤマ  
 小田原中央青果 株式会社  
 オリオン座  
 かまぼこ籠  
 令学館  
 鐘紡株式会社 小田原工場  
 カネボウ化粧品鴨宮工場  
 株式会社 神尾食品工業  
 株式会社 木地挽 日下部産業  
 かみやま小児科クリニック  
 興電社  
 小伊勢屋  
 (有) 小松石材店  
 さがみ信用金庫  
 趣味のごらく さくらい  
 宝飾専門店 Shimano

正栄堂  
 中華料理 昇玉  
 杉山水道工業 齏  
 鈴木 廣木まほこ  
 辰寿堂スポーツ  
 大営不動産  
 割烹 富る 海  
 二宮  
 茶半家具株式会社  
 ちんぎょう本店  
 土谷建設株式会社  
 角田ガクフ子店  
 東京電力(株)小田原営業所  
 株式会社 東華軒  
 トーホー建物 齏  
 和菓子 菜の花店  
 八小堂書店  
 八子マサ店  
 平井書店  
 富士写真フィルム齏小田原工場  
 株式会社 報徳  
 松坂屋  
 学生専科 丸マルク  
 食器の店 マルサンストア  
 みつゆき設計  
 諸星運輸グループ  
 株式会社 美濃屋吉兵衛商店  
 みみづく幼稚園  
 ヤオマサ株式会社  
 山口菓子舗  
 株式会社 ユアサコーポレーション 小田原製作所  
 防災器具 優光社

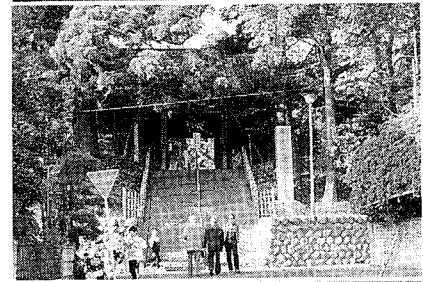
伊藤高子、湯川玲子、  
 剣持芳枝、小川武朗、  
 門松操、早野尊子、中  
 村喜久代、山下美代子、  
 藤沼キク子、内田美枝  
 子、神野美代子、竹内  
 生子、石黒栄治、富田  
 俊和、鶴井道泰、和田  
 治助、本多孝三、稲毛  
 平吉、曾我保夫、三尋  
 木啓子、小室泰子、村  
 山千鶴子、天野宏、吉  
 池清 以上四十名



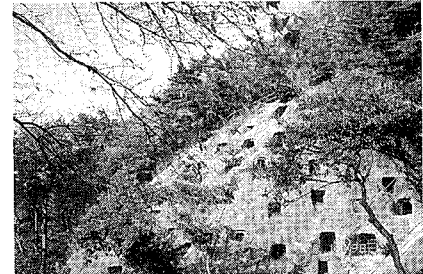
坂東十番正法寺



国史跡菅谷館跡



坂東十一番安楽寺



吉見百穴



吉見百穴にて

振替  
 年会費 普通会員三千円  
 〇〇二〇一三六四三三六